

マサル、ジョウトへ行くってよ。

井ノ下功

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ひよんなことからジョウト地方へ飛び込んだマサルがロケット団と戦う話。

※※※過去捏造注意※※※シリアルス、何でもアリの方向け※※※チャンピオン就任から1年ちよいぐらいの時空です。

目 次

のみこむ—1	1
のみこむ—2	2
インファイト—1	1
インファイト—2	2
インファイト—3	3
閑話：ふいうち	1
あくのはどう—1	1
あくのはどう—2	2
あくのはどう—3	3
じこあんじ—1	1
じこあんじ—2	2
閑話：かぎわける	1
閑話：つめとき	1
うずしお—1	1
うずしお—2	2
パークアウト—1	1
パークアウト—2	2
閑話：ぼうふう	1
閑話：りゆうのまい	1
閑話：おきみやげ	1
閑話：ドラゴンダイブ	1
せいなるほのほ—1	1
せいなるほのほ—2	2
せいなるほのほ—3	3

のみこむ——1

マサルがダンデから貰ったヒトカゲは、あつと言ふ間に成長してリザードンになつた。今ではチームのメインアタッカーだ。

(こいつの父親は、ダンデさんのリザードン、だよね……)

ついさつきバトルタワーで倒してきたところだ。つまりあれは、新旧チャンピオン対決にして、父子対決でもあつたのだ。

(……え、もしかして、ひどいことさせた?)

ふとそんな気持ちがよぎつたが、当のリザードンは間の抜けた笑顔でカレーが出来上がるのを待つてゐる。頑張つたご褒美に彼の大好きなきのみをたくさん入れたから、いつもよりさらに機嫌が良さそうだ。鼻の穴が大きく膨らんでいるのがその証拠。

(考えすぎか……)

リザードンが『まだ?』とでも言いたげに、小さな唸り声を上げた。その鼻先をちよいと撫でる。

「もうちよつとで出来るからな、待つてろよ——」

「美味そうだな!」

「わあっ?!」

マサルは飛び上がつて頭上を振り仰いだ。

「ダンデさん……」

「やあ」

ダンデが上から覆い被さるようにして、マサルの手元を覗き込んでいた。群青色の髪が無造作に垂れ下がつて、カーテンみたいに揺れる。金色の瞳がにっこりと弧を描いた。

「バトルタワーの目の前でキヤンプを始めるやつなんて君くらいのものだぞ、チャンピオン!」

「あ、まずかつたですか?」

「オレをまぜてくれたら不間にしよう!」

「やつたあ。どうぞどうぞ」

「よーし、みんな出てこい!」

ダンデが放り投げたボールから、ポケモンたちが飛び出してくる。

バトルを通して散々慣れ親しんでいる彼らは、さつそくマサルのpokeモンたちとじやれつき始めた。

「うん？——ああ、いいよ。いつてくるといい」

ダンデがリザードンに向かつてそう言つて、軽くその背を叩いた。どすどすと歩いてきた彼は、マサルのリザードンを誘うように空へ向かつて鼻を向けた。

マサルの隣に寝そべつて火の様子を見ていたリザードンが、パツと身を起こした。そしてこちらを見下ろして小首を傾げる。その仕草でマサルは察した。

「うん、いつておいで。出来上がつたら呼ぶから」

リザードンは嬉しそうに一鳴きして、ばさりと翼を打つた。

二匹揃つて空中に舞い上がる。

「おわっ」

マサルの帽子が風圧で飛ばされた。そうなると見越していたダンデは帽子を華麗にキャッチして、マサルの隣に腰を下ろす。

「ん」

「すみません、ありがとうございます」

「本当、君つてバトルしてない時は普通の少年だよな」

「バトル中だつて普通の少年ですよ」

「ははは、それは知らなかつたぜ」

マサルは帽子を被りなおして、カレーをかき混ぜながら空を仰いだ。

二匹のリザードンがくるくると飛び回つてゐる。嬉しそうな鳴き声がここまで届く。マサルのリザードンの方がわずかに声が高くて、よく喋つてゐる。対するダンデのリザードンは、落ち着いた低音ボイスで、時折あいづちを打つように鳴いた。

父親に話すのが楽しくて仕方ない息子と、息子の話を聞くのが樂しくて仕方ない父親。

二匹の姿はそんな風に見えた——

「手を止めると焦げるぞ、マサル？——マサル！ どうしたんだ?!」「……え？」

肩を揺すられて、マサルははたと我に返つた。そうして初めて、自分が涙を流していたことに気が付く。

「あれ？ なんで僕、泣いて……ええー？ なんだろうこれ、あはははは」

マサルは誤魔化すように笑いながら、慌てて手の甲で涙を拭つた。しかしダンデは誤魔化されなかつた。

「何かツラいことがあつたのか？ ホップと喧嘩したか？ あいつ、へそを曲げると長いからなあ。どうしようもなくなつたらオレを呼ぶんだぜ、どうにかしてやるから。それとも、何か変なファンが付いたか？ 悪口とかは日常茶飯事だから、あんまし気にしない方がいいぜ。愚痴つていいんだからな、いつでも聞くぞ」

両手をわたわたと動かしながら気遣つてくれるダンデがじたばたするウソハチみたいに見えて、マサルは少しだけ笑つた。

「違うんです、そういうんじゃないくて」

「じゃあ、どういうのなんだ？」

「んーと……何て言つたらいいんですかね……」

マサルはもう一度空に目をやつた。

「……お父さん、つてどういう感じなんだろうなあつて思いまして」

「」

「僕は、自分の父親のことを何にも知らないんです」「何も？」

「はい」

マサルは片手でカレーを混ぜながら、もう一方の手でボストンバッケを引き寄せた。

長くて過酷な旅を耐え抜いた、丈夫で便利なカバン。すなあらしの中に飛び込んで、冷たい海に落ちても、まったくへこたれることなく中身を守り抜いてくれた陰の相棒。

「このカバンはお父さんの物だつたらしいんですけど……それだけです。写真も何も無いし、話にも出てこない。何となく、聞いちやいけないのかなあつて思つて、母さんにも聞けない今まで……」「そうか……」

「だから、リザードンたちを見てたら、なんか——なんだろう——……
微笑ましく……羨ましく？ なつちやつて……」

そうだ、それで、マサルは思ったのだ。

「……あんな楽しそうに話す二人を、戦わせちゃって、良かつたのかな
……」

咳いたのは無意識のことだった。

「——それは駄目だぜ、マサル」

のみこむ——2

「それは駄目だぜ、マサル」

「え？」

ダンデがあまりにも真剣なまなざしで、マサルを見据えていた。マサルは睡を飲み込んだ。肩書が変わらうとも、その威風はチャンピオンのまま、変わらない――

「マサルはオレがリザードンを出してくるつて分かつて、リザードンをメンバーに入れたんだろう？　だつたら、それを後悔しちゃ駄目だ。それは、君の指示に全力で従つたりザードンに対する侮辱だぜ」「つ……」

マサルはうつむいた。

その通りだ。分かつててメンバーにした。分かつててあえて挑んだ。そしてリザードンはマサルの指示に見事に応えて、急所にしつかりと技を当てて、ダンデのリザードンを倒したのだつた。

マサルの頭を帽子越しに撫でて、ダンデは優しく続けた。

「それに、心配は無用だと思うぞ」

「――」

「何て言つたつて、オレが育てたりザードンからな！　誰が相手だろうとバトルは全力で！　全力でやつて勝つたら『嬉しい』、負けたら『悔しい』、それ以外は何も思つてないぜ！　あの様子を見れば分かるだろ？」

ダンデの言葉に導かれるようにして、三度空に目をやる。

相変わらず、二匹のリザードンは仲睦まじく飛び交つてゐる。その二匹がふと、自分たちが見られてゐることに気が付いたらしい。ぴたりとその場に止まると、ボンツ、と揃つて火の玉を空に吐き出した。「楽しそうだなあ！」

「……そうですね」

マサルはひよいと立ち上がると、「おーい、カレー、出来たよー！」

と二匹に向かつて大きく手を振った。

その声を聞きつけて、ばらばらに遊んでいたポケモンたちがぞろぞろと集まつてくる。

「人と十二匹がずらりと並ぶと、なかなかに壯觀だ。

「やつべ、足りるかなあこれ……カビゴン、悪いけどちよつと遠慮してくれる？」あとで別の何かあげるから

「オレは大盛りで頼むぞ、マサル！」

「遠慮してください、飛び入りのダンデさん」

「ここのおーナーは誰だと思つている？」

「うわあ、パワハラだあ」

などと言つてはいるが、マサルはカレーが充分足りることを知つている。

(カビゴンのために常に三倍にして作つてて良かつた……)
食費が異常にかかつてしまふことを幸運に思つたのは初めてだつた。

ダンデが「いたくぜ！」と皿に顔を突つ込むようにして食べ始めた。マサルもスプーンを動かす。話しながら作ったカレーは少しだけ焦げているようにおいがした。

(でも、なんか特別な味がする、ような気がする)

取れた胸のつかえが入つているのかもしれない。隠し味とかスペイスとか言うにはなんとも苦みが強いけれど。

「おつ、すぐ美味しいぞ、マサル！　これはリザードンの好きな味だな！」

ポケモンたちに囲まれてカレーを頬張るこの瞬間が何よりの幸せだ、と大声で言つてはいるかのようなダンデの満面の笑み。

良かつたです、よく分かりましたね——と返しながら、マサルはぼんやりと想いを巡らせた。

(ダンデさん、さつきのバトルで僕に負けたこと、忘れたわけがないのに)

全力で悔しがる人だと知つてはいる。握りしめた拳を震わせながら、健闘を讃えて『次は負けないぞ！』と笑う姿を、何度見たか知らない。

でも、

(バトルはバトル、カレーはカレー……つてことかな)

こういう人だから、周りの人たちに慕われているのだろう。チャンピオンでなくなつても、変わらず愛されているのはそういうわけに違いない。マサルだつて懷いている人間の一人である。

(……リザードンも同じ。バトルはバトル。お父さんはお父さん。

……お父さん、か)

——僕のお父さんは、どんな人なんだろう。

いつか分かる日が来るだろうか。来なかつたらどうしようか。その内割り切れるものなのだろうか。好きなタイプじゃなかつたらどうしよう。そもそも、どうしていらないのだろう。どこかに行つてしまつたのか、あるいはすでに死んでしまつたのか――

「つ！」

ふいにリザードンが背中に鼻をこすりつけてきた。

まるで、マサルが形のない不安に包まれているのを察したかのように。

(そつか。みんながいれば大丈夫か……)

リザードンだけじゃない。一緒に旅をしてきた仲間たちが、父親よりも深く心に寄り添つてくれている。

マサルはリザードンの鼻先を撫でて、スプーンを握り直した。

「やつぱちよつと焦げくさいですね」

へらりと笑うと、ダンデは「でも美味しいからヨシ、だぞ！」と笑い返してくれた。

それからダンデは、皿の上の残りを一気に流し込んで、飲み物のようごつくんと喉を鳴らした。

「ああ、美味しかった！ ごちそうさま、だ！」

「ふあへるのふあやいっすね――」マサルは口の中のものをのそのそと飲み込んだ。「――ダンデさん

「これでも今日はゆつくりだつたぜ！」

「マジすか」

マサルは思わず呆れた気持ちで彼を見てしまつた。そう言われて

みれば、彼がゆっくり座つて物を食べているところなど見たことなかつたような気がする。

(胃がやられそうだな……特性は“がんじょう”かな)

ダンデさんには“ほののからだ”の方が似合うけど、と勝手な想像をしながら、自分のペースでスプーンを口に運ぶ。

新入りのポケモンが食べ終わるのを待つていたらしく、しばらくしてからダンデは立ち上がった。

「じゃあな、マサル。またいつでも挑戦しに来てくれ!」

「あ、しばらく来れないと思います」

「忙しいのか?」

「図鑑のためにヨロイ島へ行くことになつたので」

「へえ! ヨロイ島へ!」

ダンデの目がきらりと輝いた。

「あそこは迷いやすいからな、気を付けるんだぞ!」

「ダンデさんじやないんで平氣です」

「言うようになつたな、この!」

「いててて、背え縮んじやう!

縮んじやう!!」

ダンデはけらけらと笑いながら手を離した。

「じゃあ、君がいない間にたくさん修行しておこう。次は絶対にオレが勝つからな!」

何気なくなされた宣戦布告を、マサルは真正面から受け取つてにっこりと笑つた。

「はい、楽しみにします!」

なんならこのあとすぐにでも再戦したいぐらいだ。けれどダンデにも仕事があるし、マサルだつてチャンピオンとしてやらなければならないことがある。ヨロイ島へ行くためのもろもろの調整とか、取材とかジム訪問とか。マネージャーさんの目をかいくぐつてここに来たことを思い出し、マサルは少しだけ憂鬱になつた。

ダンデはリザードンの首を撫でながらタワーの中に戻つていった。その大きな背中を見送つて、マサルは少しだけ彼の真似をした——すなわち、残つたカレーを一気に喉へ流し込んだのだ。

「うつ、うつ、ぐふつ」

見事に喉に詰まつた。吐き出しそうになつたのをギリギリでこらえて飲み込む。

(……やっぱ、僕は僕、だよなあ)

心配そうに、あるいは呆れ返つた目ですり寄ってきたポケモンたちを撫でてやりながら、マサルはそんなことを思つた。

「ヨロイ島、楽しみだな！」

ポケモンたちが同調シンクロして跳ねるように声を上げた。

インファイト——1

一ヶ月後、ヨロイ島から戻つてきたその足で、マサルは即座にシユートシティへ降り立つた。ブティックに寄つてから小走りにバトルタワーへ向かう。

「heyロトム、ダンデさんに電話して！」

『了解口ト～！』

コール音が少しだけ。ダンデはすぐに応答した。
『もしもし』

「あつ、ダンデさん？ ご無沙汰します」

『久しぶりなんだぜ。ヨロイ島はどうだつた？』

「その辺の話はまた後ほど。すぐ会いに行きますんで、ウォーミングアップしておいてください」

『お、ああ、ん？』

ダンデが困惑したような声を上げていたが、マサルは一方的に通話を切つた。

(ヨロイ島での修行の成果を、つていうか一ヶ月もダンデさんと勝負しないとかもうマジで我慢ならないんだよなあ！)

バトルタワーへ飛び込む。「あつ、チャンピオンだ！」「チャンピオンがオーナーに挑みに来たぞ！」などと騒ぎ出した周りの人たちへ、ちよつとだけ手を振つて応対して、カウンターに駆け寄る。

「シングルバトル、手持ちからこの三体で！」

「承知いたしました。では、こちらへどうぞ」

慣れているスタッフは余計なことなど一切言わず、マサルをエレベーターへ案内した。

バトルタワー、マスター ボール級。

(よーし、いくぞ！)

マサルはバトルモードにスイッチを切り替えた。途端に表情が動き消えることは、本人だけが知らないでいる。

†

『キュウコン、ダウン。勝者、チャレンジャー・マサル』

アナウンスが淡々と告げて、負けたトレーナーが去っていく。続けて勝負をしますか？ という問いはもうされない領域にまで入っていた。やるに決まっているのだから。

コート内に備え付けられている回復装置でポケモンたちを回復させながら、マサルは静かに待つ。

『バトルオーナー、ダンデとの勝負です。なお、このバトルの様子は録画され、バトルタワー・チャンネルから配信されます。ご了承の上』

一方の壁が開き、ダンデが入ってきた。その瞬間、コート内の空気がピリッと張り詰めた。ゆつたりとした王者の足取り。肩書が変わつても服装が変わつても、変わらないきんちようかん——いや、プレッシャー。

マサルと正対する位置について、ダンデはにつかりと笑った。

「やあ、久しぶりだな、チャンピオン・マサル！」

その言葉が単なるパフォーマンスでしかないことを、彼の金色の目ははつきりと告げていた。隠し切れていないぎらつきが、『早く勝負を始めたい』と吠えている。

「来てくれてありがとう。君とのタワーでの戦績は一勝二敗だ。そろそろドローにしたいところなんだぜ」

「……負けません」

マサルは呟くように言った。ダンデとの久々のバトルが嬉しそぎて、へにやりと緩みそうになつた頬をぎゅっと引き締める。ボールをぐつと握る。バクバクと脈打つ心臓を右手で押さえつけ、背中の裏に回した左手でボールをぐつと握る。

ダンデは口から下をキヤップで隠した。それが素の表情を隠すための仕草であることをマサルは知つていて。外した時にはいつもの爽やかな営業スマイルになつていた。

「それじゃあ始めようか！ 今までで最高の試合をしよう！」
「はい。——行きます！」

二人は同時にボールを投げた。

「いつておいで、ウーラオス！」

「いくぜ、ゲンガー！」

ゲンガー。ゴースト・どく。すばやさやとくこうが高くてバトルタワーでも人気の一休だ。

（一撃で沈める――）

対するこちらのウーラオス。ヨロイ島でマスターード師匠から貰つたダクマの進化形。いちげきのかたに育てたから、タイプはかくとうにあくがプラスされて、ゲンガーに対しては非常に有利だ。

「ウーラオス、あんこくきようだ！」

裂帛の気合とともに放たれた拳が、ゲンガーの急所に突き刺された。必ず急所に当たる技の上、こうかはばつぐんだ。とても耐えられるものではないだろう。

ゲンガーの体がぐらりと揺らぎ――

「ゲンガー、マジカルシャイン！」

「つ!？」

ゼロ距離から打ち出された輝かしい光が、ウーラオスの巨体を吹き飛ばした。

マサルはわずかに目を開き、事態を察して思わず睨むような目付きになってしまった。

「きあいのタスキ……」

「ゞ名答！」

一撃で沈められる技を受けた時、ギリギリのところで持ちこたえるための道具。ゲンガーが口の中に隠し持っていたのだ。使い物にならなくなつたそれを、ゲンガーはペッと吐き出した。

あの様子では、こちらがウーラオスを使つてくることも読まれていたに違いない。

（読まれてた、か……ダンデさんもあそこで修行をしたって話だし、当然と言えば当然か）

完璧に沈められたウーラオスをボールに戻す。

「お疲れさま、ウーラオス。――いこーや、カビゴン！」

「二体目はカビゴンか！」

嬉しそうに笑つたダンデが、こちらの動きを探るような目付きに

なつた。

(うん、そうですよね。狙いは分かつてます……！)

二人の声が重なる。

「ゲンガー、みちづれ！」

「カビゴン、たくわえる！」

きあいのタスキ持ちのゲンガーといえば、みちづれ戦法だ。不発に終わつた作戦をダンデは素早く切り換えた。

「ヘドロウェーブ！」

ゲンガーを中心に毒の波が流れ出る。

だが、元々のとくぼうの高さに加えてたくわえるの分が上乗せされているから、ほとんどノーダメージだ。カビゴンは波をのつしのつしと踏み分けて、

「したでなめる！」

こうかはばつぐんだ。

「オーケー、ゲンガー。ナイスファイト！」

ダンデは素早くゲンガーを戻した。

(僕がカビゴンを使うことは候補に入っていたはず。だつたら、ダンデさんの二体目は――)

「いこ、ドラパルト！」

繰り出された二体目を見て、マサルは内心ガツツポーズをした。にやけそうになつたのを寸でのところで抑えこむ。

(やつぱり！)

高HPを削りきるのに必要な高火力を持つたポケモンが必要で、タイプは不問で、何体か選択肢がある時、ダンデはなんとなくドラパルトを選ぶことが多いような印象があつた。おそらくそういう思考のクセがあるのでだろう。

「りゆうせいぐん！」

ドラパルトの咆哮によつて生み出された隕石が無数に降り注ぎ、カビゴンに突き刺さる。床の上で隕石が碎け散り、真っ白い粉塵が濛々と立ち上つた。

インファイト——2

(頼む、耐えてくれよ、カビゴン……)

粉塵を腕で遮りながら、巨体の影を探す。

——立っている。ギリギリだが、カビゴンはまだ戦える。

(よし……っ)

「カビゴン、なげつける」

最後の力を振り絞ったような雄たけびを上げて、カビゴンが持ち物を思い切り投げた。持たせていたのは“くろいてつきゅう”。なげつけるで最も高い威力を叩き出す道具だ。

空を切り裂く音がして——白煙の向こうに、着弾した鈍い音。粉塵が晴れる。と、倒れたドラパルトの後ろでダンデが驚愕の表情を浮かべていた。

しかし、

(……喜んではいられないな)

カビゴンの巨体がぐらりと落ちた。ゲンガーのヘドロウェーブでどくをくらっていたのだ。

「お疲れ、カビゴン。——ラストです」

「ああ、クライマックスだ！」

お互の三四目は分かつている。

「リザードン！」

二体のリザードンが同時にコートへ躍り出た。

「いわなだれ！」

先手を取ったのはマサルのリザードンだった。分かつていた。すばやさはこちらの方がわずかに上である。

「リザードン、ひるむな！」

ダンデが声を張り上げた。

(ひるめ……っ！)

三十五パーセントの確率を当てにしてはいない。だが、ひるんでくれれば勝利が確定になるのも確かだ。向こうは間違いなく、一撃で沈められないための対策をしてきている。たぶんきついタスキかなに

か。

(ひるめばストレートで僕の勝ち。ひるまなくてもこのターン向こうの攻撃を耐え切れば僕の勝ち、だ!)

「リザードンっ！」

ダンデの声に応えるように、リザードンが吠えた。ひるまなかつたのだ。

「げんしのちから！」

周囲に巻き散らかされた岩がふわりと浮かんだ。遠吠えに呼応するように、それらが一気に刃となつてマサルのリザードンを滅多打ちにする。

マサルのリザードンは大きく体勢を崩して床に落ちた。マサルは一瞬ひやりとした。

(やつぱ、ヨロギの実じや無理があつたか?!)

敗北の予感にドクン、と心臓が脈打つて——だが、リザードンは倒れなかつた。

(よし、耐え切つた!)

確信する。勝つた。これでおしまいだ。

「いわなだれ！」

「げんしのちから！」

同時に下された最後の指示は——

——もう一度浮かび上がつた岩が、マサルのリザードンを撃ち抜いた。

ズン、と床が振動する。リザードンの巨体が崩れ落ちたのだ。
戦闘不能。

それを確認したマサルは、信じられないという目でダンデを見た。ダンデは金色の瞳を爛々と輝かせて、勝者の笑みを浮かべていた。「オレの勝ちだぜ、チャンピオン!」

ダンデのリザードンが勝ち誇った声を上げた。

それでようやく現実を飲み込んだ。どうして、なんで、なぜダンデのリザードンの方が先に技を出せたんだ? 疑問が脳内をぐるぐると渦巻いて——バトルモードのスイッチがパチンッと落ちた。

(なんにせよ、僕の負け、だ!)

マサルの肩からフツと力が抜ける。

「あー、負けたーっ!」

とその場に大の字に寝転がる。それなりに高いジャケットが砂まみれになるが、そんなこと構つていられない。リザードンをボールに戻して、マサルはぼーっと天井を見上げた。それでようやく思い至る。

「……そつか、げんしのちから……」

いつの間にかすぐ傍にまで来ていたダンデが、マサルを覗き込んで笑つた。

「十パーセントに賭けるのはちょっと怖かつたぜ」

「三十パーセントに裏切られた時点で、流れはそつちのもんでしたよね……」

いわなだれを受けてひるむ確率は約三十パーセント。

げんしのちからですべてのステータスが上がる確率は、約十パーセント。

わずかしかないすばやさの差は、これで充分にひっくり返せる。一こういうことがあるから、先にカビゴンで少し削つておいて確実に決めに行きたかったのだが。

(ああ、駄目だつた……)

予定が狂うなどよくあること。特にダンデが相手だと、予定なんてあつてないようなものだ。彼の実力の前にはそんなもの簡単に覆され、想像も出来なかつた光景が目の前に広がる。

悔しい。だがそれ以上に、楽しい。

「運頼みにさせたのは君の実力だ。素晴らしい試合をありがとう、チャンピオン!」

差し出された手を、マサルはしつかりと握り返して起き上がつた。

「次は負けませんから」

ダンデは何より嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。

インファイト——3

コート内で散々感想戦をやつていたら、「長いです！　いい加減にしてください！」と飛び込んできたスタッフに、続々はオフィスでやつてくれと追い出されてしまった。

（はあ……負けた……）

シャワールームを借りて砂ぼこりを流していると、悔しさがじんわりと染みってきた。さつきやつた試合の光景が頭の中をぐるぐる駆け巡る。

（運要素を出来るだけ排除して勝つには——やつぱり二体目までリザードンを少しでも削つておかないと厳しいよな。そうすると——わざ——もるもの——とくせい——うーん、熱が出そう！）

ラフな格好に着替えてシャワールームを出る。

ダンデのオフィスに入ると、難しい顔でパソコンと向き合っていたダンデが顔を上げた。

「感想戦、どこまで配信する？」

「どこまでも。別に聞かれて困ることは言つてませんし」

「だよなあ。じゃあ全部上げるぜ！」

「なんで迷つてたんです？」

「かなり詳細に戦法を語つてたから、この先の戦いで不利になるんじゃないかな、つてスタッフが心配してたんだ」

「……へえ？」

ピンときていらない様子で首を傾げたマサルに、「だよなあ」とダンデが笑みを漏らす。

「それで、ヨロイ島はどうだつたんだ？」　師匠はお元気だつたか？

「ああ、はい、それはもう！」

マサルはソファに飛び乗つて、ヨロイ島でのことを話し始めた。マスター・ド・師匠の課題のこと、ジムリーダーを目指す弟子に絡まれたこと、デイグダを探して島中を駆けずり回つたこと、ウーラオスのキヨダイマックスのために必要なミツのこと——

「そしたらホップが来ていて、探すのを手伝つてくれました」

「そうか！ ホップはどんどん成長していくな。元気そうで何よりだ」

「しばらくヨロイ島にいるつて言つてましたよ」

「じゃあ今度行つてみるぜ。久々に師匠にもお会いしたいし」

— そうですね —

「…………」

簡単なあいづちを最後に、マサルはふと言葉を切った。
「……どうした？」
氣配の変化を鋭敏に感じ取るダンデは、まるで野生のポケモンみたいだ。

「……………実は、カバンが壊れちゃって」

!

「ムカついたんでめちゃくちゃ倒しました……」
うああああああと叫びながらソファに倒れ込む。

「生態系を崩さない程度に頼むんだぜ……」

「兄弟で同じこと言わなくてください……」

マサルはクツショウを抱き締めて転がった。

か落ち着かなくつて」

「そうか……早く直つてくるといいな」

二
ノ
レ
シ

返事をしながら、無理だろうと思つてゐる部分がある。けつこうひどくズダズダにされてしまつたのだ。あの無残な姿を元通りに出来るなら、いくら掛かつてもいいと思つてゐる。金で解決できるならそんな簡単な話はない。

そんなことを思つてゐると、スマホがひよいと目の前に浮かんでき

た。

『マサル、ブティックから電話口トゞ』

ブティック、ということは、タワーへ来る前にカバンを預けてきたところだろう。

「はーい。もしもし——」

電話の内容は、カバンの修復はやはり難しいという話だった。試行錯誤したけれど、元通りにはどうしてもならない。別の生地でつぎはぎするか、いつそまつたく違うものに加工してはいかがでしょうかと。

マサルは意氣消沈しながら、のつそりと起き上がり返事をした。
「……はい。わかりました。じゃあなんか、何でもいいです。加工して……なんか、持ち歩けるものにしてください」

『かしこまりました。——それとですね、その……修繕するために一度分解したところ、中から不思議なものが出てきまして』

「不思議なもの?」

『はい。背の部分の生地の中から、金色と銀色の——葉っぱ? のようなものが』

「はあ……」

『どうなさいますか?』

「……一応取りに行くので、保管しておいてもらつていいですか
『かしこまりました』

電話を切る。

それを見計つて、ダンデがヒトカゲ柄のマグカップをマサルの前に置いた。

「ありがとうございます」

「カバン、駄目だつたのか?」

「はい……」

しゅんとしたままマグカップを持ち上げる。ホットミルクだつた。ほんのり甘くてどこか懐かしいような味がした。

「気落ちするのは分かるが、落ち込みすぎるんじゃないぜ」「はい……これ飲み終わつたら立ち直ります」

「うん、それがいいぞ」

ダンデが優しく微笑んで頷いた。

(お父さんのカバンが壊れた、つてことより、ずっと一緒に旅をしてきた相棒が壊れたつてことの方が、こたえてるんだよなあ……くつそサメハダメーめ、もつと倒してくれれば良かつた……)

逆恨みであることは理解しているから、わざわざもう一度島に行つてまでやろうとは思わないけれど。

マサルはホットミルクを飲み干した。

大きく伸びをしながら立ち上がる。

「んー、よし！ 長居しちゃつてすみません！ そろそろ僕、行きますね！」

「おう。また来てくれよな！」

「はい！ 次は勝ちますから！」

「次も負けないぞ！」

それじゃあ、とマサルは元気に駆け出していった。

彼の次のダンデへの連絡が「ちょっと僕ジョウト地方に行つてきます」になることなど、誰にも予想できることだつた――。

？

閑話：ふいうち

「やあ、キバナ！」

にこやかにリザードンから下りたダンデを、しかめつ面のキバナが出迎えた。

「よーお、ダンデえ」

「どうした？ 顔がしわくちゃピカチュウだぞ」

「お前らさあ、自らの希少価値分かつてる？」

「何の話だ？」

顔中に疑問符を貼り付けているダンデに、キバナは溜め息をつきながら「一週間前のバトルタワーの動画！ くつそ長え感想戦だよ感想戦！」と怒鳴り声を出した。

「ああ！ ……あがどうしたんだ？」

「あんな貴重な情報を無料で大放出してどーすんだって話だよ！ 百歩譲つてお前はまだいいとしても、マサルは毎年チャレンジヤーを迎え撃つ立場だぜ！ この間一回目の防衛を果たしたばつかの新米チャンピオン！ なのにあんだけ自分のクセとかなんとか話しまくつたら、不利になるに決まつてんだろ?!」

本気でマサルを心配している様子のキバナの背中を、ダンデはばんばんと叩いた。

「平気さ、キバナ！ マサルはそう簡単には負けないぞ！」

「そーだらうけど

「万一負けたとしても、絶対に這い上がつてくるぜ。——這い上がれなかつたら、そこまでの奴だつたつてだけだ」「つ……」

キバナは言葉を詰まらせた。ダンデの目は本気の色を讃えていた。彼は時々こうやって、誰よりシビアな一面を見せることがある。バトルに関しては特に——。

自分がひるませたことに気が付いたのか、ダンデはパツとキバナを見上げると、眼光をやわらげた。

「なに、心配はいらないさ。マサルがどんな奴か、君だつてよく知つて

いるだろう？　君を負かし、オレを負かした少年だ。たつた三十分程度じや彼の全部は語り切れないし、オレたちがこうしている間にも新しい戦い方を編み出してるぜ、きっと」

「……そーだな」

自分が一度も勝てていなかこの男から平然と勝ち星を奪つていつて、へらへら笑つている少年がマサルだ。心配するだけ損だったのかもしれない、とキバナは息を吐いた。

「あー、それで思い出した。マサルにさあ、ワイルドエリアの一角を占拠してバトルの練習すんのやめろって言つといくんねえ？」

「なぜだ？　いいことじゃないか」

「いや、一人で完結しての練習ならいいんだよ。でもアイツさあ、野生のポケモンに自分の特訓手伝わせてるみてえでき……おかげで、げきりんの湖にいる連中のレベルがめきめき上がりつててな。この間調査に行つたら、平均レベルが80超えてた……」

「あー……」

「いやオレさまとかお前ならいいぜ？　でも一般トレーナーが知らずに入りこんだら、マジで死にかけるぞ？」

「……注意しておこう」

「言外に“無駄だろうけど”と漂わせながら、ダンデは頷いた。
「それで、今日のエキシビションマッチのことなんだが——」
と本題に入りかけた、その時。

『マサルから電話口トヽ』

「——噂をすれば、つてやつだな」

出てもいいか、と目だけで問いかけると、キバナは軽く頷いた。
「もしもし、マサル。ちょうどいいところに——」

『あ、もしもしダンデさん？　ちよつと僕ジョウト地方に行つてきます。それじゃあ！』

ブツツ、ツー、ツー、ツー……。

隣で聞いていたキバナが目をパシパシさせた。

「……なあ今ジョウトに行くつて言つてなかつたか？」

「……オレの幻聴だと思ったんだが、キバナにもそう聞こえたか？」

「そう聞こえた」

「そうか……」

事実を飲み込んで——次の瞬間、大人二人は揃つて「あああああああの馬鹿！」と叫びながら頭を抱えた。

「アイツはニュースを見てねえのか?! オイ!」

「ロトム！ リダイヤルしてくれ、リダイヤル！」

「ジョウトつつたら今話題じやねえかよ！ ニュースでも新聞でもネットでも——」

とキバナが開いたネットニュースの一面には、大きな見出しが躍っている。

『ロケット団の復活！ 每晩襲われるジョウトの町々、被害甚大』
目的不明。規模不明。とにかく夜陰に乘じて町を襲い、ポケモンを使つて人を傷付けているのだと報じられている。

他地方の人間は出来るだけ近寄らないように、とも書かれていた。

「——見てねえつづーのかよコレを！ 馬鹿かアイツは！」

「駄目だキバナ、どうしよう！ 通じない！」

ダンデが単独のヨワシみたいな顔になつていた。握りしめたスマホからは、『ただいまリザードンに乗つて移動中ロトム。お急ぎの方は諦めるロトム。その内折り返すロトム』と、ロトムの声——を真似したマサルの声が流れ出している。

「なんつだその音声！ ムカつくなあクソツ！」

「うん、オレも今初めて殺意とかいうのを感じたぞ！」

「そうか！ 人間らしくなつたなダンデ！」

「どういう意味だキバナ?!」

ひとしきり騒いだ二人は、荒くなつた息をようよう整えて——

「……とりあえず、ジョウトの知り合いに連絡しておくぜ……キバナ、君からも時々電話をかけてやつてくれ」

「りょーカい。本つ當に人騒がせな奴だよなあ……チャンピオンつてやつはみんなこうなのかな……」

「ん？ オレがいつ人を騒がせた?」

「チャンピオンになつた直後にワイルドエリアに消えていつて、二週

間戻つてこなかつたことを忘れたのか?」

「あれは普通に遊びに行つてただけだぜ!」

「……帰つてきたら、マサルも同じこと言いそうだな……」

そーゆーとこだぜチャンピオン、とキバナは口の中で呟いた。

あくのはどう——1

ジョウト地方までの空の旅は、快適とは程遠いものだつた。

「もう一度とやらん……絶対にやだ……」

季節が悪かつたのかもしぬないが、それにしても、だ。まさか嵐に巻き込まれるとは思つてもみなかつた。途中で不時着するはめにならなかつたのが奇跡である。マサルは疲労困憊の状態で、ジョウトの一角に降り立つた。

「お疲れ、リザードン」

「ばぎゅあ……」

「お前が一番大変だつたよなあ。本当にお疲れ……すぐポケモンセンターに行こうな……」

ぐつたりと首を垂れるリザードンをボールにしまいながら、自分もその場にへたりこんでしまいたくなつたのをこらえて、マサルはスマホを出した。

「h e yロトム……、こ、どこ?」

『マップアプリを起動するロト! ——更新情報を取得しているロト、しばらく待つんだロト! ——現在地はジョウト地方、ヨシノティの南だロト!』

「よしのしてい……」

ぐるりと辺りを見回す。もうすっかり日が落ちてしまつて、辺りは闇に沈んでいる。ささやかな街灯が点々と立つていて、町の中心部までの道をぼんやりと照らしていた。人気はなく静まり返つていて。その道をゆつくりと、ポケモンセンターを目指して歩き出す。

(ブラツシータウンみたいな雰囲気だな……いい感じ)

吸い込んだ空気は異国のだ。ガラルより少し湿っぽいような感じの中に、知らない花の香りが混ざつていて。

(別の地方に来たんだなあ。なんか感動的だ)

いつか行つてみたいとは思つていたが、こんな風に突然行くことになるとは思わなかつた。

そもそもこれもすべて、カバンの中から見つかった二枚の葉っぱが原

因である。

——きんのはつぱ。
——ぎんのはつぱ。

ブティックの人からそれらを貰った瞬間、これは何か特別なもののような気がする、と思つたのだ。その感覚は、ザマゼンタのくちたてを手にした時とよく似ていた。

(放つておいやいけない、つて思つた……勘だけどさ)

ホップはヨロイ島、ソニアは冠の雪原に行つてしまつていなかつたから、マグノリア博士に調査を頼んだのだつた。

調査結果が出るまでの間、ハロンタウンの自分の家に戻つて、お母さんに話を聞いてみた。

ずっと聞いてはいけないような気がしていた、お父さんことを。
(母さん、案外アッサリしてたな……)

マサルが振り絞った勇気を嘲笑うかのように、平然とお母さんは話してくれたのだつた。

父親の名前はカット。ジョウト地方の出身。なぜかワイルドエリアで行き倒れていたところを、ジムチャレンジ中だつたお母さんが偶然助けたのだという。そこから、シユートシティまで一緒に旅をして——恋愛をして——結婚した。

だが彼は、マサルが生まれた頃にふらりと出ていつてしまつて、それきり消息を絶つたのだそうだ。残されたのは、一緒にシユートシティで買つたボストンバッグだけ。

『もしマサルが将来ジムチャレンジをするつて言い出したら使わせてやつてくれ、なんて言つてさ。ふらーっと。それつきり。……まあ、どこかで、そういう人だつて分かつてたからね。そりや出ていかれた時はびつくりしたし、ショックだつたけど……でも、私にはマサルがいるからね。全然平気よ!』

とお母さんは笑い飛ばした。

(だから、僕も気にしないでいいんだ、つて思つたんだけど)
マグノリア博士の調査の結果を聞いたら、ここへ来ずにはいられなかつたのだ。

博士いわく、この二枚の葉っぱをつけるような木は現実に存在しないものだ、という。

『おそらく、ジョウト地方の伝説のポケモン、ルギアとホウオウに関するものと思われます。用途は不明です。——根も葉もない噂だと、ぎんのはっぱをルギアに、きんのはっぱをホウオウに持たせてウバメの森の祠へ行くと、ときわたりポケモンのセレビィが出てくる、とかいうものがありますね。これは単なる都市伝説ですが』

ただ持っている分には何の問題もないでしよう、と締めくくられた話を聞いて。

(お父さんはどこで、『この世に存在しないはずの葉っぱ』を手に入れたんだろう)

とマサルは思つた。

(どうやつて手に入れて、何をするつもりだつたんだろう)

(何のためにカバンに仕込んだんだろう)

(そのカバンを置いていつたのはなんでだろう?)

(わざわざ、僕に使わせろ、なんて言い残して!)

(お父さんは一体何を考えていたんだ!?)

疑問が次々にむくむくと湧いてきて、どうしようもなくなつたのだ。それで、勢いガラル飛び出してきてしまつた。

手掛かりなんか何一つとしてないのだから、疑問は解決しないかもしない。だが、それでも。

謎に包まれているお父さんが生きていた場所を。

ジョウトという世界を見てみたかった。

(……ダンデさん、怒つてるかなあ……)

ちよつと僕ジョウト地方に行つてきます、とだけ告げて、電話の向こうからどんな反応が返つてくるかなど確認しようともせずぶち切つたのだ。

リダイヤルが何十件と入つていたのを思い出して、マサルは少しだけ顔を引き攣らせた。

(ちゃんと話した方が良かつたかな……まあいつか。帰つたら怒られよ一つと)

仕事の類は一通り終わらせてきたから大丈夫なはず、オフシースンだし、どうせすぐ帰るのだし——と思いつながら通りを曲がり、ポケモンセンターの看板を見つけた、その時だつた。

ドガツシャーンツ！

「つ?!」

大きな破壊音が夜の静寂を打ち破つた。

「なんだ……？ うわっ！」

ポケモンセンターから真っ黒い煙が上がつてゐる。

「え、なんで？ 火事？ 事故？ いや、でも、さつきの音——」

まるでタネばくだんのような音だつた、と思つた瞬間、ポケモンセンターから黒ずくめの人たちが次々飛び出てくるのが見えた。その人たちはポケモンを従えて、四方八方に散らばると、

「かえんほうしや！」

「タネばくだん！」

「シャドーボール！」

と——民家に向かつて、攻撃を始めた。

「……え？」

目を疑うマサルの前で、家から出てきた人たちが逃げ惑う。ポケモンを持つてる人も、持つていない人もいた。中には反撃を試みる人もいたが、大抵は無抵抗のままただ逃げていく。

(な、なにこれ、どういうこと？ なんでポケモンで人を襲うんだ？ どうして……)

混乱するマサルの目に、逃げようとして転んだ少年が映つた。

少年はポケモンを抱えていたが、戦える様子ではない。なのに、その後ろにニユーラが迫つてきている。

「きりさく！」

街灯の光を反射する爪が見えた時、マサルは反射的にボールを投げていた。

「ニンファイア、チャームボイス！」

必ず当たる音波の攻撃。それは過たずニユーラを吹き飛ばした。マサルは少年に駆け寄つた。

「君！ 大丈夫?!」

「う、うん……ありがとう……」

手を貸して立ち上がらせる。短パンから出ていた膝がすりむけていたが、それ以外の怪我はなさそうだった。

敵の男が高らかに舌を打つのが聞こえた。

「歯向かうものには容赦しないぞ！ ズバット、きゅうけつだ！」

「ニンフィア、ムーンフォース！」

すばやさはこちらが上。月を見上げて吠えたニンフィアの美しい声が波動となつて、突つ込んでいたズバットをはじき返した。

(――？ 今あのポケモン、僕の方に向かつてこなかつたか？)

マサルは疑問に思つて首を傾げた。

その一瞬の隙に、

「お兄ちゃん危ない！」

「つ?!」

あくのはどう——2

影から飛び出てきたポケモンが、咄嗟に飛び退いたマサルの肩口を切り裂いた。

「いつ……たあつ?! な、んで……え?!」

肩に走った痛みが混乱を助長する。

(トレーナーを狙つた攻撃?! そんなの……!)

ガラルではトレーナーに向けた攻撃は違反中の違反だ。わざとそんなことをしようものなら、二度とバトルコートに立てなくなつてしまふ。

だが、黒ずくめの連中はそんなことお構いなしのようだつた。

「そこだ、ナイトメア!」

「ちや、チャームボイス!」

ぎりぎりのところで相殺させることに成功した。ニンファイアが心配するように足元にすり寄つてくる。反対側には、心底怯え切つた様子の少年が。

マサルは彼に向かつて問い合わせた。

「ねえ君……ここでは、トレーナーに向かつて攻撃するのって、ありなの?」

少年はきよとんとした目でマサルを見上げた。

「公式戦ではなしだけど……ロケット団はそれが普通だよ?」

「ロケット団? つて、この人たち?」

「そうだけど……お兄ちゃん、もしかして違う地方の人?」

「あー、うん、その通り——ムーンフォース!」

再び背後から飛びかかってきたゴーストを返り討ちにする。

それで手持ちが尽きたらしい男が、貧乏ゆすりをしながら喚いた。

「くそつ、おい! このガキ、うざいぞ! 潰せ!」

その声に敵が集まってきた——その数、五、十、十五——周りをすっかり取り囲んだ連中が、それぞれ一体ずつポケモンを繰り出した。五体以上のポケモンに囲まれて、少年が悲鳴を飲み込んでマサルの足にしがみつく。

マサルはぐくりと唾を飲んだ。

(ええー……なんだこれ。どういうこと? なんでもありの大乱闘つてこと? マジか……きつつ……)

だが、自分がどうにかするしかなさそうだ。マサルは腹を括った。

「君、名前は?」

「え、僕? 僕は、ロクロウ……」

「オーケー、ロクロウ。君のそのポケモン、戦えるよね?」

「えつ?」

「倒せとは言わない。ただ、自分の身は出来るだけ自分で守つてほしい……正直、君の方まで手が回るとは思えない。なるべく気を遣うけど——」

悠長におしゃべりをしている暇など無かつた。

四方八方から一斉にポケモンが襲い掛かつてくる。出来るだけ視野を広げてそれらを見ながら、

(ダブルバトル×八、つてことね! 全然オーケーじゃないけどオーケー理解した!)

マサルはボールをいつぺんに放り投げた。

「カビゴン、たくわえる!」

背後にカビゴンを配置して壁にする。カビゴンにはそこでしばらく耐えてもらうしかない。大丈夫、彼になら任せられる。マサルの信頼を保証するように、カビゴンが軽く吠えた。

「ニンフィア、チャームボイス! インテレオン、だくりゅう!」

二体同時攻撃ができるポケモンはそれを基軸に、とにかく数を減らす。

それをすり抜けてこちらに向かってきた奴には、

「ウーラオス、かわらわり! フライゴン、ドラゴンクロ一一!」

物理単体攻撃で完全に仕留める。

(リザードンは疲れ切つてから駄目……だけど、うん、大丈夫。どうにかいける!)

次々と繰り出される技によつて、すさまじい勢いで敵ポケモンが減っていく。

「す、す……！」

口クロウが呆然と呟いた。

「クソッ、何だこのガキ！」

「たつた一人のくせに……っ！」

「もっとポケモンを出せ！ 数で押せ！」

「畳みかける！」

怒号が飛び交い、包囲網が一段と厚くなつた。

マサルは頬を伝つた汗を手の甲で拭つて、カビゴンの背に寄りかかるようにしながら戦場を見つめた。

「カビゴン、のみこむ！ もう一回たくわえる！ ——ニンフィア、マジカルフレイム！ フライゴン、むしくい！ ——インテレオン……っ？」

矢継ぎ早の指示を遮るように、チクツ、と、腕に何かが刺さつた。大した痛みではない、が。

「何だ、これ。……針？」

確認した瞬間、ぐらりと視界が歪んだ。

(針……針と言えば……どくばり……どくばり!?)

やばい、と思つたマサルがカバンに手を伸ばした時にはもう遅かつた。

全身から力が抜けて膝が落ちる。

「お兄ちゃん?!」

「がつ、はつ……ぐ、うう……」

手足がしびれて震えていた。頭蓋骨を内側から殴られているような頭痛と、胃がひっくり返るような吐き気に襲われて、脂汗が全身からにじみ出る。

マサルの手持ちたちがびくりと動きを止めた。

「とま、るな……っ！ だいじよぶ、だか、ら……」

こちらを窺つたポケモンたちに向かって、どうにかそれだけを言つた。ポケモンたちは指示に従つて振り向くのをやめたが、まだ心配が勝つようで、動きは精彩を欠いている。このままじや負ける。

「口、口ク、口ウ……カバンの、なかに……どくけし、が……」「この中に?! ちょ、ちょっと待つて……えーと……どこ?!」

慌てふためいた口クロウが、カバンのジッパーを全開にして、マサルに見せつけるようにした。

が、新調したばかりのカバンのせいで、自分でもどこに何が入っているのか分からなかつた。ましてこの状態では冷静に考えることなど出来やしない。いろんな道具が雑多に詰め込まれている中に、金色と銀色の葉っぱが輝いているのが見え——それが三重にぶれて、ぼやけていく。

(やばい……意識が……)

これって死ぬんだろうか、それは嫌だなあ……などと思いながらも、離れていく意識を引き留められなくて、マサルはぐらりと倒れた。

「——しつかりしたまえ、ガラルのチャンピオン!」

凛とした声が空から降ってきた。

あくのはどう——3

「しつかりしたまえ、ガラルのチャンピオン！」

「……へ？」

呆けた声で反問した瞬間、口に何かを捻じ込まれた。冷たい液体が流れ込んできて、思わず喉を鳴らす。

「安心してくれ、ただのどくけしだ」

その言葉の通り、マサルは遠退いていったはずの自分の意識が戻ってくるのを感じた。吐き気も痙攣も収まつていく。ゴリランダーのドラムアタックみたいだった頭痛も鳴りを潜めた。

「しかし、一人でここまでやるとは……さすがだな。話に聞いていた通りだ」

「……話？」

「細かいことは後で。今は——こいつらを一掃する！」

真っ赤な髪を逆立てたその人は、マントを翻して空を指差した。

「蹴散らせ、カイリュー！　はかいこうせん！」

降り注いだ真っ白な光線に視界を焼かれて、マサルは思わず目を閉じた。轟音が耳を塞ぎ、口クロウに悲鳴を上げさせる。爆音が収まつて、恐る恐る目を開けると、

「——う、わ……」

その場にいた全員が倒れていた。問答無用で、一撃で。一番外側にいた敵の何人かは元気に立ち上がり逃げ出そうとしたが、空から降りてきたポケモンに行く手を阻まれて尻餅をついた。

マサルはその光景を呆然と眺めた。

(はかいこうせんを放射状に放つて……しかも、僕のポケモンたちは避けて、なおかつ人は殺さないように、威力を調節して？　どうやるんだそんなこと……出来るんだ、そんなこと！)

混乱と興奮の渦の中に座りこんでいるマサルを見下ろして、その人はニッコリと笑つた。

「はじめまして、おれはワタル。ジョウトへようこそ、マサルくん」

「どうして、僕の名前を——」

「ダンデくんから連絡を貰った」

「ダンデさんから?!」

驚きを隠さないマサルを前に、ワタルはくすりと笑つた。

「連絡がなかつたとしても君のことは知つてたよ。ダンデくんを破つたガラルの新チャンピオン。——おれは、ジョウトのチャンピオンだからね」

「ジョウトの……チャンピオン……！」

つまりジョウトで一番のトレーナーってことか！ と理解した途端、マサルの目がぱあっと輝いた。

（強いわけだ……戦つてみたい！）

さつきまで死にかけてしたことなど記憶の彼方に追いやられたようだつた。

ワタルが呆れたように苦笑した。

「聞いていた通りの戦闘狂のようだね」

「え、なんて聞いたんです？」

「ポケモンバトルに関してはガラルで一番詳しくて粘着質、だけどそれ以外に関してはまつたく世間知らずの少年がそっちに行きます、と」

「そんな?!」

（ひどいなダンデさん！ 帰つたら文句言わなきや……）

実際ニユースの類をまったく見ていないという事実を棚に上げて、マサルはぷくりと頬を膨らませた。

「とりあえず移動しよう。ここまでやつておけば、あとは警察が片付けてくれるからね。少しだけ歩くけれど、大丈夫かい？」

「はい、大丈夫です」

マサルは立ち上がりつた。カバンをあさつてきずぐすりを取り出し、肩の傷に吹き付ける。どくけしが効いたのだからこれだつて効くだろう、と思つたのだ。

（予想通り効いてる……け、ど、めっちゃ染みる！）

涙目になつたマサルにポケモンたちが心配そうにすり寄つてきた。彼らを一通り撫でてやる。

「みんなお疲れ。がんばったな。よーし、戻つておいで！」

「一匹くらいは護衛に出しておいた方がいいよ」

「マジですか。じゃあ……インテレオン、まだいける？」

彼はこつくりと頷いた。インテレオンを残して全員をボールに收め、ロクロウからカバンを受け取る。

ロクロウは目を真ん丸にしたまま、マサルを見上げていた。

「あ、あの……」

「ん？ 何？」

マサルは片膝をついてロクロウと目を合わせた。

「その……お、お兄ちゃんは、何者なの……？」

「僕？ 僕はね、マサル。ガラル地方つていうところから来た、ただのトレーナーだよ」

「でもさつき、チャンピオン、つて……ワタルさんが……」

「うん、ガラルのリーグのチャンピオン。この間防衛に成功したから、今年で二年目なんだ！」

マサルはへらりと笑つた。

その間抜けな笑顔とさつきまでの猛烈な戦いぶりの温度差に、ロクロウは目を白黒させていたが、マサルはまつたく気が付かないで再び立ち上がつた。

「じゃあね、ロクロウ。気を付けて帰るんだよ。またね」

「あ、うん……」

「じゃ、行きましょうかワタルさん。どっちですか？」

「こつちだよ」

ワタルの先導に従つて後をついていく。

「——あ、ありがとう！ マサルお兄ちゃん！」

背中を追いかけてきた感謝の言葉に、マサルは手を振り返して応えた。

じこあんじ——1

ワタルの後についてヨシノシティを出る。一気に木が増えて、ホー
ホーたちの鳴き声があちこちから聞こえてきた。

「無事ジョウトに着いたこと、ダンデくんに連絡したかい？」

「あー、いえ……それは、まだ……」

「してあげた方がいい。すごく心配していたからね」

そう言われると、怖いとかなんとか言つていられなくなつてしまつ
た。

「……hey口トム、ダンデさんに電話して」

『了解口ト～』

コールは一回で即座に繋がつた。

瞬間、怒鳴り声が飛んできた。

『マサル！ 今どこで何をしているんだ？！ ジョウトに行くつて突然
どうしたんだ、君は馬鹿か？！ というか一方的に通話を切るのはやめ
てくれ！ 人の話は最後まできちんと聞きなさい！』

「……はあい、すみませんでした……」

『まつたく……ジョウトの今の情勢を知つてているのか？』

「じょーセー？」

『ロケット団が復活して毎晩町を襲つていると、こつちのニュースで
もやつてているだろう？ まさか、本当に何も知らないで行つたのか
？』

「あー、はい」

電話越しでも風圧にやられそうなほど大きな溜め息が聞こえた。

『君つてやつは、本当に……ワタルさんに連絡しておいて良かつたぜ
……』

「あ、はい、助かりました。ねえワタルさん」

「そうだね」

『えつ、もう会つたのか？！』

「はい。さつそくロケット団の襲撃に出くわして——あ」

『襲、撃？』

「……元気です。元気なので平気です、はい」

「どくばりくらつて死にかけてたけどね」

「ワタルさん!？」

『マサル?! どくばりつてどういうことなんだ?』

「ええと、あの……と、とりあえず無事なので！ ワタルさんのおかげで！ つまりダンデさんのおかげでもあります！ ありがとうございます！」

いました！ それじゃあまた連絡しますんでサヨウナラおやすみなさい！」

一息に言い募るとマサルは通話を切った。

はあ、と息を吐いてスマホをしまうと、ワタルの呆れた目と目が合つた。

「ついさつき一方的に電話を切るなど怒られていなかつたか？」

「あー……そんなような気もしますね……」

「駄目だよ、マサルくん。心配してくれる人たちのことは大切にしなくては」

マサルはちよつとムツとして黙り込んだ。

(どうして会つたばかりの人にここまで言われなくちゃいけないんだろう？ それに、ダンデさんにだつて別に心配してくれつて頼んだわけでもないんだし……まあ、おかげで助かつたんだけどさ)

ふくれつ面を隠さないマサルに苦笑を向けて、ワタルは前方を指した。

「ほら、見えてきた。ワカバタウンだ。急ごう。きつと待つてるよ」

「待つてる？ 誰がですか？」

「ウツギ博士だよ。マグノリア博士から連絡があつたらしくてね、会うことがあつたら案内してあげてほしいと頼まれたんだ。君に会つたことをさつき伝えたら、ぜひ連れてきてほしいって」

「そうだつたんですか」

たぶん、きんのはつぱとぎんのはつぱのことが気になつてているのだろう。それを知りたいに違ひない、とマサルは思つた。

(それは僕も知りたかつたから、嬉しいなあ。お土産買つて帰らなきや)

「ワタルさん、ジョウトの名物って何ですか？」

「名物？ やっぱり、いかりまんじゅうじゃないかな」

「あー、お饅頭か。マグノリア博士つて甘い物お好きかなあ」

「ふつふふ、のんきなものだ。だが、そのためには手を貸してもらわないとどうないかもしれないな」

「手を貸す？」

「ああ。ロケット団のせいで、いかりまんじゅうの店は臨時休業中だからね」

「えっ！」

「君の実力は先ほど見させてもらつた。ロケット団流の戦い方には慣れる必要があるけれど……」

と、ワタルは何かを含んでいる微笑を浮かべた。

「観光に来たつもりだつたんだろうが、悪いね。今はとにかく手が足りなくて。手伝ってくれるだろう、ガラルのチャンピオン？」

「はい」

マサルは即答した。

「はつきりした目的があつて来たわけじゃないですし……僕が力になれるなら喜んでお手伝いします」

「心強いな。よろしく」

「よろしくお願ひします」

ワタルとがつちり握手をする。その手のひらの硬さに、マサルはダンデを思い出した。

ワカバタウンの中もかなり静かで、人の気配はまったく無かつた。それがもともとこの町の性質なのか、襲撃を恐れて息を潜めているのか、マサルには分からなかつた。

「さあ、着いた。ここがウツギ博士の研究所だ」

温かな光を灯す家のインターフォンを押すと、中からパタパタと駆けてくる音がして、

「はいはいはい……あつ、やあ、ワタルくん！」

「こんばんは。お久しぶりです、ウツギ博士。夜分遅くにすみません」「いやいやいやいや、いいんだよ！ さあ入つて入つて。あつ、君が噂

のガラルチャンピオンなんだね？」

ようきな性格で眼鏡をかけたりグレーみたいだなあ、と思いながらぼんやりしていたマサルは、はたと我に返り慌てて帽子を取り、「はじめまして。マサルです」

「マサルなんだね。よろしく！ マグノリア博士から聞いているよ。すごい強いんだってねえ。あと、なんだか不思議なものを持つてきてた、つて。あ、ごめんごめん、僕はウツギ。ここでポケモンの研究をしているんだ。テーマは進化！ ポケモンつてすごいよねえ。特に進化のメカニズムはまだ解明されていない部分がたくさんあって、研究しても研究しても終わりが見えないよ！ ガラル地方のポケモンの中にも面白い進化をする子がたくさんいるよね、たとえばマホミルー！」

「——博士」

「ああごめんごめん、つい熱が入っちゃつて！」

ワタルが咳払いをしたものだから、ウツギ博士はぱたりと口を閉じた。

それから改めて二人を招き入れ、しつかりと鍵をかけた。

「ごめんねえ、最近物騒なものだから。こんな状況じゃなければ、ジョウトのあちこちを案内してあげたいところだったんだけど。あつ、ヨシノシティはどうだつた？ 大丈夫だつた？」

「被害は最小限に抑えられましたよ。マサルくんのおかげでね」

「おお、さつすがチャンピオン！」

真っ直ぐに褒められて、マサルは照れくさくなつた。

研究所の回復装置でポケモンたちを休ませながら、勧められるまま夕食をご馳走になる。その間、ウツギ博士はマサルが出したきんのはつぱとぎんのはつぱをしげしげと眺めては書架に行つたり、パソコンを叩いたり、あれこれわたわと走り回つていた。

大きな尻尾の上に体を乗せて、跳ねるように移動していくポケモンが、器用にお茶を運んできた。

「わあ、ありがとう」

マサルはお茶を受け取つて、そのポケモンを撫でた。

「知らないポケモンくんだ。ノーマルっぽい顔してるねえ。性格はひかえめかな？」

「それはオタチというんだよ」

「オタチ。尾っぽで立つから？ あはは安直。分かりやすくていいね。よーしよしよし」

短いけれど柔らかい毛に手をうずめて、もふもふもふと撫でまわす。オタチは気持ちよさそうに尻尾の上で体を揺らして、マサルの膝にすり寄った。

じこあんじー2

片手でオタチを撫でながらお茶を啜っていたら、神妙な顔つきの博士がのそのそと戻ってきた。マサルに向かいにゆっくりと座つて、重たい口調で博士は切り出した。

「うーん、マサルくん、これは大変なものかもしれない」「大変なもの、ですか」

「うん……」

机の上に並べた二枚の葉っぱをじっと見下ろして、ウツギ博士は言葉に迷つていていた。オタチがひよいとマサルの手から脱け出していつて、キッチンから博士の分のお茶を持ってきた。

「ああ、ありがとう」

博士はそれでちょっと喉を湿らせてから、改めて話し出した。

「君は、この地方に伝わる伝説のポケモンのことを知つているかな?」

マグノリア博士が何か言つていたような気がする。マサルは記憶を掘り返した。

「ええと……ルギアとホウオウ？ でしたつけ」

「そう。——ルギアとホウオウは、ジョウト地方のポケモンにとつては神様みたいな存在でね。何か大きな災害が発生した時には、ポケモンたちを守つてくれると伝わっている。今から……十年とちょっと前くらいかな。その時にも復活したロケット団があちこちで悪さをしていたんだけれど、それを収めるのにも協力してくれたんだ。ある二人のトレーナーの手持ちになつてね。その後、ルギアとホウオウは元の住処に戻つていった」

(ザシアンとザマゼンタみたいだ……そういうポケモンつてどこにもいるんだな)

ホップと一緒にムゲンダイナに立ち向かつた記憶は、もう遠い過去のことのように感じられた。まだ一年とちょっとしか経つていないのに。

「再びジョウトに危機が迫つてている今、ルギアとホウオウは目を覚ますかもしれない。——で、問題は、おそらくロケット団の目的がその

「一匹だということなんだ」

「えーと、わざと暴れてルギアとホウオウを呼び出して、それを捕まえてもつと暴れよう、つてことですか？」

「その通り」

それってやばいんじやないか、とマサルが言うより早く、博士が続けた。

「ただ、彼らは知らないんだ。十年前も、ルギアとホウオウはただ自然に出てきたわけじやなかつた。ロケット団を壊滅させた二人のトレーナーは、それぞれにじいろのはねとぎんいろのはねを持つていて、それによつて一匹を目覚めさせたんだ。それらは使い終わつたら消えてしまつたらしいんだけど……」

と、博士はもう一度、机の上の二枚の葉っぱに視線を落とした。葉っぱはただ蛍光灯の光を反射しているのではなく、自ら発光しているように見える。その神々しさに触れるのを躊躇つたのか、博士は葉っぱの少し横を指先で叩いた。

「このきんのはつぱとぎんのはつぱは、同じような役目をするかもしれない。その二人に見せてもらつたはねと同じエネルギーを発しているから。……君がこれを持つてているということをロケット団が知つたら、彼らは君を狙つてくるだろう」

「それじゃあ——」

「そうなる前に君はガラルへ——」

「僕がルギアとホウオウを捕まえにいけばいいんですね！」

「え？」

「え？」

きよとんとしたウツギ博士につられて、マサルも首を傾げた。

「だつて、そうじやないですか？ 僕が一匹を捕まえて、ロケット団壊滅を手伝つて、それから一匹を逃がせば、全部丸く……收まり、ますよね？」

「その通りだね。話が早くて助かるよ、マサルくん」

笑いをこらえるような顔でワタルが肯定した。

「じゃあすぐに——」

行きましょう、と言いかけたマサルを、ワタルは遮った。

「だが、今日のところは休んだ方がいい。長旅からの戦闘で疲れただろう？ 博士、部屋を貸していただけますよね」

「う、うん……それはいいんだけど……」

「細かいところはおれと話しましょう」

博士はまだなにか言いたそうにしていたが、やがて諦めたように息を吐き出した。

「……そうだね。じゃ、オタチ、マサルくんを案内してあげてくれるかな？」

きゅーい、と鳴いたオタチがマサルの足元にすり寄つてくる。

「じゃ、マサルくん。また明日」

「自分の部屋だと思ってゆつくりしてくれていいからね」

「はい、ありがとうございます、博士、ワタルさん。……じゃあ、おやすみなさい」

ひらひらと手を振る大人二人に、半ば追い出されたような感じを覚えながら、マサルはちょっと頭を下げてから研究室を出た。はっぱを無造作に放り込んだカバンを両手で抱き締めるように抱えて、自分の前をぴょんこぴょんこ跳ねていくオタチについていく。

「……なあオタチ」

「きゅい？」

「僕まだ元気なんだよ？ そりや、長旅だつたし、バトルもしたけど……話をするくらいはどうつてことないんだ」

「きゅうう？」

「……君に言つても仕方ないよね。ごめんよオタチ」

「きゅい、きゅい！」

案内された部屋は小さかつたけれど、綺麗に整えられていた。博士のところには泊りでくるお客様が多いのだろう。

一仕事終えてご機嫌そうなオタチを見送つて、マサルはベッドに転がつた。言葉で言つたほど体は元気でなくて、あつと言う間に眠くなつた。意地を張つたマサルはしばらく睡魔に抵抗していたが、すぐに、抵抗する気力ごとねじ伏せられて。

翌日、すさまじい爆発音で起こされるまで、夢すら見なかつた。

閑話：かぎわける

ナツクルスタジアムの屋上でスマホを眺めながら、キバナは呻いた。

「まあ……つじで、ワタルさんは天才だな」

早朝のネットニュース。更新されたばかりの速報記事には『ガラルのチャンピオン、ボランティアとして参戦』という見出しが躍っていた。記事の中では、ワタルがダンデに救援を求めて、ちょうどオフシーズン中で手の空いていたマサルが自分から意思表明しジョウトに行つた、ということになつていて。

「昨日の今日でこの対応か……スゲーや、うん」

これでマサルがロケット団と戦う羽目になることは確定したが、どうせ彼のことだ、放つても勝手に巻き込まれて戦つていたに決まっている。

（お人好しじやねえけど、黙つて傍観するようなやつでもねえからな。
——そもそも戦闘狂バトルマニアだし。バトルが始まつたら飛び込むだろ）

それならこうして堂々と名乗り出ておいた方が何かと都合がいい。（上手くやりやマサルの株も上がるし……SNSに目撃情報も上がりやすくなつて、こつちもアイツの消息を把握しやすくなつた。これで少しばんざりの心労も和らぐ——と、いいんだけどなあ）

昨晩ダンデからの電話で聞いた話では、さつそくロケット団の襲撃に巻き込まれたマサルがどくばりをくらつて負傷したという。重たい溜め息を漏らす。

（マサルは強いけど、『お行儀のいいバトル』しか知らない。
ルール無用のロケット団の相手はキツツイだろうな）

無論、ガラルでだつて野生のポケモンを相手にすれば、トレーナーが負傷することもある。だが、バトル中に故意に狙われて技を受けることは、たとえ野良試合であつてもありえない。マサルには想像するできない世界がそこにはあつて、きつと今頃戸惑つていることだろう。

「あのお騒がせ野郎め。ダンデだけじゃなくてマグノリア博士まで心配して、こつちに連絡よこしたっていうのによ」

自分が心配とか迷惑とかを掛けていることを、理解できないほど馬鹿ではないはず。

ただ、それらを受け止める度量だとか、全部ひつくるめて抱き締めるような強さがまだないだけで。

キバナは大きく伸びをして、東の空を眺めた。

そして、ゴウと吹き付けた冷たい風に嵐のにおいが混ざっているのを感じ取つて眉を顰める。職業病のようなもので、天候には敏感なのだ。

「……やな感じがするぜ。これは砂嵐になるな」

こういう日はワイルドエリアでの遭難者が増えるのだ。そのことを予測したキバナは、小走りにジムの中へ戻つていった。

? ?

閑話：つめどぎ

口ケツト団が拠点にしているビルの最上階に、明かりが灯つていた。

大きなパソコンの前に男が一人座っている。

神経質に固められたオールバツクの髪と、青い血管が浮かんでいる病的な肌以外は真っ黒だ。下っぽとさして変わらないデザインの黒い服。

だが、彼こそが現在の口ケツト団のボスを務めている男——カルムだ。

カルムはロトムドローンを飛ばしておいた自分の入念さに感謝をした。科学の力はすごいものだ。こんなに遠く離れていても、夜であろうと、相手の顔から手元からバッグの中身まで、ハツキリ鮮明に見えるのだから。

「見つけた……きんのはつぱ！　ぎんのはつぱ！」

画面にかじりつく。

「しかも持ち主はガラルのチャンピオン……ふつ、ははつ、あははははははつ！　皮肉なものだな！　神様のイタズラか？！　だとしたら最高のイタズラだ！　——私が世界のチャンピオンとなる最後の戦いに、これほど相応しい相手はない！」

デスクの上を引っ搔き回し、一冊のファイルを手に取った。

「ガラル出身、マサル、現在十一歳。手持ちはインテレオン、カビゴン、ニンフィア、フライゴン、リザードン、ウーラオス——先鋒はカビゴンにしがち、だがウーラオスが入ったからこには変わるかもしれないな——こうべきの高いポケモンが多い短期決戦型——」

パソコンを操作する。開いたプレイリストには、ガラルのリーグ戦やバトルタワー戦の動画がずらりと並んでいた。一番古いものは十年前から、ついさつき配信されたばかりのエキシビション・ダンデ対キバナ戦まで。

憎たらしい相手が僅差で負けた戦いのサムネイルを見て、ニヤリと口角を上げる。

「あれから十年も経っているのに、まだアイツは負け続けて……成長のない男だ」

カルムは鼻で笑った。

（それに対する、私はどうだ？　――対策は万全だ。あれからずつと戦い続けてきた。今の私が、負けるはずがない！）

一週間前に配信されたダンデ対マサルのバトルタワー戦を再生する。腑抜けた顔で自分の弱点やクセをべらべらとしゃべる幼い少年。

――その姿に、かつて自分を負かした相手の姿が重なつて見えた。十近く年下の少年に大観衆の前で負かされて、苦汁をなめた記憶がフラツシユバツクする。

（年下に負ける気分が分かつたか？　キバナ――拳句の果てに、最大のライバルすら倒されて。よくもへらへらと笑つていられるものだ……）

苛立ちの余り無意識のうちに爪を噛んでいた。

（……一度と、二度とこんなガキに負けてなるものか……つ！）

凶惡な光で目をぎらつかせるカルムに、相棒のキュウコンがそつと寄り添つた。

パソコンの中のライブ映像は、ワタルと合流したマサルが歩き出したところだった。

（あの方角は――ワカバタウンか。ということは）

カルムはキュウコンの頭を撫でながら、スマホを取つた。

「――ああ、ご苦労だつたな。――次の襲撃先を指示する。ワカバタウン、ウツギ研究所だ。準備が出来次第、襲い尽くせ！」

うずしお——1

轟音と振動。

「つ、な、なんだ?!」

マサルは飛び起きた瞬間、薄いピンク色の煙に視界が覆われた。

「博士! ワタルさん——つ?!」

(これ……マタドガスのガスだ!)

煙の向こうからはバトルの音と、誰かの怒鳴り声のようなものが聞こえてくる。が、すぐ遠くのことのようにくぐもつていて、よく聞き取れなかつた。

マサルはガスを吸い込んでしまわないように腕で口を覆いながら、研究室の中に踏み込んだ。

(みんなは……確か、こつちの方……いた!)

回復装置にセットされたままになつていたマサルの手持ちたちは、戦闘の気配を鋭敏に察知して、ボールの内側をカタカタと叩いていた。みんなすっかり元気になつていてる。

(よし、僕も行かなきや!)

マサルはベルトにボールをセットしながら、一つを放り投げた。

「リザードン! 吹き飛ばせ!」

軽く吠えたリザードンが翼を打つて、風を巻き起こした。バタバタバタ、と資料が舞い上がる音と一緒に、ガスがみるみるうちに晴れていく。

あつと言ふ間に視界はクリアになつた。

と、

「ウツギ博士!」

博士が床に倒れているのが目に入つて、マサルは駆け寄つた。

「大丈夫ですか、博士!」

「う……」

小さな呻き声を上げて、博士はうつすらと目を開けた。腕から血が流れている。マサルは咄嗟に辺りを見回して、落ちていたタオルを拾

うと傷に押し付けた。

「博士、僕どうすればいいですか？　あ、口トム！　h e y口トム、病院に連絡して！」

明るい声が『了解口トム』と応えて、カバンのポケットからふわりと出てきた。

「ま、マサル、くん……」

か細い声で呼びかけられて、マサルはパツと耳を寄せた。

「悪いん——けど……今すぐ、うずまき島、か……う、に——つてほしい……」「

「うずまき島？」

ガスを吸い込んだせいでひどく掠れていた声を、どうにか聞き取る。

博士はかすかに頷いた。

「ルギ——ウオウが、降り立つ——て言われ……で、ワタルくんが、押さえて——から……君——つて、知られる、前に……」「わかりました！」

ロトムが繫いだ先に簡単に状況を伝え、よたよたと駆け寄ってきたオタチにきずぐすりとタオルを渡す。

「オタチ、博士をよろしく」

「きゅい！」

「行こう、リザードン！」

「ぎゅあつ！」

マサルは裏手の窓から外に飛び出ると、リザードンの背に飛び乗つた。

「h e yロトム、うずまき島までナビゲート開始！」
『了解口トト！』

「リザードン、しばらくは低空飛行でよろしく。ばれないように気を付けていこう！」

「ばぎゅあ！」

力強く返事をして、リザードンは体勢を低くしたまま一気にスピードを上げた。

†

眼下の海には大きな渦潮が発生していた。そのすぐ隣に大きな島がある。

『目的地周辺に到着したロト！ ナビを終了するロト～！』

スマホロトムがするりとカバンに潜りこむ。

「ここが、うずまき島——」

それは岩山のような島で、人が住む場所ではないと一目で分かつた。ぐるりと周囲を回ると、山の側面に一ヶ所だけ穴が開いていた。それは洞窟のように島の内部に続いている。

マサルはリザードンに乗つたままその中に飛び込んだ。

（おわ、見たことないポケモンがいっぱいだ！）

状況が状況でなければ一通り捕まえておきたいところだった。（ダメダメ、今は急いで、ルギアかホウオウか分からぬけど、ここにいるつていうどつちかを確保しないと！）

マサルは頭を振つて進行方向を睨みつけた。

（僕はガラルのチャンピオンなんだから——誰にも心配されないように、しつかりやらなきや！ 大丈夫、僕は一人でもやれる！ 心配なんかいらないってところを見せるんだ！）

リザードンの首をぎゅっと抱きしめる。リザードンはマサルに応えるように、さらにスピードを上げて深層を目指した。

島の最深部には、透き通つた湖が広がっていた。神秘的な色を湛え
る、美しい湖。

マサルはリザードンから降りて、湖のへりに立つた。

「ここ、かな……」

マサルはある種の確信をもつて呟いた。大きく深呼吸をする。ま
どろみの森の最奥部の空氣と似た味がした。

カバンのジッパーを開ける。

「お」

ぎんのはっぱが光を放つていた。蛍光灯の下でないからよく分か
る。

（やつぱりここだ！ 間違いない！）

マサルはぎんのはっぱを取り出し、湖の上にそつと浮かべた。

「つ！」

咄嗟に帽子を押さえる。どこからともなく強い風が吹いたのだ。湖が渦を巻いた。ぎんのはっぱは光を強めながら、くるくると回つて沈んでいく。

底が見えるほど強く、強く渦を巻いて――

「――カツコイイ……！」

湖の中から現れた大きなポケモンに、マサルは思わず目を奪われた。

伝説のポケモン、深海を統べる神——ルギアが、マサルを見据えて大きく吠えた。

うずしお——2

——伝説のポケモン、ルギア——

美しい白銀の滑らかな体。背びれのような突起は深海の色。ゆつたりと広げた翼はダイマックスを疑うほど大きくて、カツと見開かれた瞳は深淵の漆黒。長い首を悠々と廻らせて、マサルをその視界に收めると、

「——！」

神威を感じさせる音波がびりびりと洞窟を揺らした。

マサルの背筋がぞくりと粟立つた。手足がかすかに震え出したのを、意識的に抑えこむ。右手で胸元をぎゅっと握りしめて、左手でベルトのボールを触る。

(すごい……プレッシャーだ……)

カラカラの喉に重たい唾を無理やり流し込み——スイッチを切り替えた。頭の中が冷え切つて、不安と恐れが消え去る。ここにあるのはポケモンとの真剣勝負、それだけだ。

(ひこうは確実かな。あとはみず？　いや、ドラゴンかも。わからないな。けど、)

「戻れ、リザードン」

みずタイプかもしれない相手にリザードンは危険だ。

「いつておいで、カビゴン！」

限られた陸地の上で、カビゴンが両腕を広げて吠えた。

(まずは相手の出方を見よう)

それに触発されたように、ルギアがもう一度咆哮し——バトルの火蓋が切って落とされた。

ルギアが口を大きく開けた。そこに水の塊が凝縮していく。

(ハイドロポンプか！)

放たれた激流の弾丸を真正面から受けて、カビゴンは二三歩後退した。

(すごい威力だ……)

とくぼうに自信があつて、タイプ的に不利ではないカビゴンが、

ここまでHPを削られるなんて。

「たくわえる！——もう一回！」

深く息を吸つたカビゴンの背中は二回りぐらい大きくなつたよう
に見えた。

（たべのこしで回復しながら、少しだけ耐える——）

一つ羽ばたくたびに大風が起き、吹き飛ばされそうになるのを耐え
ながら、マサルは目を凝らした。

ルギアが空中で二撃目の体勢に入つた。

「カビゴン、右だ！」

マサルの声に合わせてハイドロポンプを避ける。地面が削れて、飛び散つた岩の欠片が水と一緒に降りかかつた。だがマサルは、水に濡れた服にも岩で切れた肌にも目をくれなかつた。

（やつぱりみずタイプか？　だとしたらリザードンは駄目。フライゴンも駄目だ。でも、この距離で当てに行くには——）

「よし、カビゴン、戻れ！——いこう、インテレオン！」

カビゴンとは正反対のすらりとした体を持つインテレオンが、湖に飛び込んだ。

こうかはいまひとつでも仕方がない。捕獲が目的なのだから、むしろ削り過ぎな方が都合もいい。

「ねらいうち！」

湖の中から打ち出された水がルギアの翼の付け根に突き刺さつた。

（――……？）

わずかに、だが、ルギアの体勢が崩れた。

（いまひとつ、じゃなかつた……？）

眉間にしわが寄る。

（みずタイプじゃない？　それなら一体――）

考え込んだ隙を突くように、ルギアが構えを変えた。

「――！」

「んっ！」

ぐわん、と世界が歪んだ。

（じんつうりき?!）

技の余波を受けたマサルはぐっと足を踏ん張つて、倒れそうになつたのをこらえた。捻じ曲げられた水の中からインテレオンが飛び出してきて、マサルの前に膝をつく。

（けつこうくらつたな……）

だがこれで分かつた。明らかに、別タイプのポケモンが出せる威力じゃない。

（ひこうとエスパー。それなら！）

「戻れ、インテレオン！」

すばやさはインテレオンの方が上だった。つまり、

「ウーラオス！」

彼の方が早く動けるということでもある。

勢いよく飛び出たウーラオスが水面を蹴つた。

「うつぶんばらし！」

鋭い拳が翼に打ち込まれて、ルギアが呻き声を上げた。巨体が斜めに傾いて、風を掴み損ねた翼が空を切る。

「よし、今だ！」

マサルは空のモンスター・ボールを掴み、大きく振りかぶった。

「――おりのつぶて」

「つ！」

氷の塊が腕に当たつて、マサルはボールを取り落とした。

パークアウト——1

腕が裂けて血が噴き出る。痛みで頭が痺れて、スイッチが切れた。

「いっ……」

何も収められなかつたボールが地面に転がる。
なのに、

「——」

ルギアはボールに吸い込まれていったのだ——マサルが投げたのではないボールに。

「そんな……つ！」

腕を押さえて目を見張るマサルの前に、一人の男が歩み出た。悪タ
イプが追加されたアローラキュウコンみたいな顔のおじさんだ。昨日
知つたばかりの真っ黒な服——ロケット団の服を着ている。傍に
付き従つていたアローラキュウコンが、牽制するような流し目をマサ
ルに向かう。

（しまつた、つけられてたのか！）

マサルは呆然と立ちすくんだ。ルギアが——あの美しくて強いポ
ケモンが、ロケット団の手に渡つてしまつた！

男は悠然とした態度で、ルギアを収めたボールを拾うと、高らかに
笑つた。

「ふつ、はつははははは！　ありがとうガラルのチャンピオン！
君の勇気と愚かさに敬意を表そう！」

「あなたは……？」

男は仰々しい動作で振り返り、マサルに向かつて厭味っぽい微笑を
向けた。

「私はカルム。ロケット団を統べる者——そして、これから君を倒し、
世界を制する者だ！」

「世界を？」

「そうさ」

カルムは自信たっぷりに笑つた。

「君は、おかしいと思つたことはないのか？　ポケモンは生まれた時

から闘争本能を持つている。だというのに、ルールの中に縛り付けて、不自由な試合をさせるなど！　生まれ持った本能を自由に発揮させるべきだ！　ポケモンにはルールなど必要ない！　それに巻き込まれて死ぬのなら、それはトレーナーの力不足だ！　ポケモンの本気

に付き合つてこそ、本当の強者、本当の共存というものだろう！」

たたきつけるような叫びにマサルはひるんだ。湖から戻ってきた

ウーラオスがマサルをかばうように立ちはだかる。

「人間のエゴに付き合わされるポケモンたちが可哀想だ。つまらない試合なんかのために本能を抑えこまれて……私はそれを解放する。そして、これこそが本当のバトルだということを、世界に見せつける！」

カルムは顔中に蔑みを浮かべて、マサルを見下ろした。

「お前だけじゃない、キバナも！　本当の争いの前には太刀打ちできまい！」

マサルはハツとした。

「どうして、キバナさんのこと……？」

カルムの目が冷たく細まる。

「……知る必要があるか？　今から死ぬ人間が！　いけ、ミミツキユ！」

「つ！」

「じゃれつく！」

ルールも構えも全部無視して出された技を、ウーラオスは真正面から受けてしまった。こうかばつぐんの技に膝をついて——その手から、役目を終えたきついタスキが落ちた。

「ウーラオス、アイアンヘッド！」

カルムはマサルの反撃を鼻で笑つた。

（分かつてるよ、特性・ばけのかわ——）

マサルは歯がみした。攻撃を受けた時に一度だけダメージを大幅に軽減する、ミミツキユならではの特性。

（——でも、押し切る！）

「ウーラオス、もう一度——」

と、出しかけたマサルの指示は、

「キュウコン、こおりのつぶて」

カルムの命令で撃たれたキュウコンの技に搔き消された。

ウーラオスが倒れるのを果然と見つめる。

「え……なんで……」

「これが本物のバトルだ。ルール？ マナー？ そんなものが争いの場に存在すると、本気で思っているのか？ 馬鹿馬鹿しい！」

両手を広げて熱弁を振るうカルムに、キュウコンが呼応して美しく吠える。

「思い知るがいい、場のすべてがお前の敵だ。ほんやりしている暇はないぞ！ ——ミミツキュ、しつとのほのお！」

「うわっ！」

自分に向けて噴き上がった炎を、マサルは間一髪のところで避けた。

（くそ、なんだコイツ……ウーラオスを戻すことすらできないなんて！）

舌を打ちながらボールを投げる。

「カビゴン！ したでなめ——」

「戻れ」

ポケモンが手元に戻る時、おいちご以外はしてはならない。トレーナーに当たる危険があるからだ。ガラルのルールが染み込んでいるマサルは思わず指示を止めた。

それをカルムは嘲笑った。

「ふつ、ははつ、模範的だな、素晴らしい！ ——その愚かさのまま死ぬがいい！ いけ、オーロンゲ！」

ボン、と飛び出てきたオーロンゲが、素早くカビゴンに詰め寄った。

「けたぐり！」

「つ」

体重が重いほど威力が上がるかくとうの技。体力が満タンの状態でくらつても沈んでいたに違いない技を受けて、カビゴンはひっくり返り沈黙した。

「この程度か、チャンピオン！」

安い挑発でも一方的に不利な状況ならば充分に効き目を持つ。マサルの脳味噌はパニックを起こした。

（まことに、このままじややられる……どうにかして打開しないと！）
二体以上同時に掛かつて来るならば、とマサルは決意した。こういう場所でこの技を使うのはあまり褒められたものではないのだが、仕方がない。

「いこーや、フライゴン！」

キバナに貰つたタマゴが孵つて、ナックラーの頃から大切に育ててきたポケモン。やんちゃな性格をちょっと封印した真剣なまなざしで、洞窟の天井すれすれまで飛び上がった。

「じしん！」

ズンツ、と洞窟が縦に揺れた。岩場がめくれ上がり、オーロンゲとキュウコンに襲い掛かる。

マサルは近くの壁に掴まつて揺れに耐えた。狙いは相手のポケモンだからダメージは入らないが、フィールドが狭いせいで多少はどうしても巻き込まれるのだ。気遣わしげにこちらを一瞥したフライゴンに、気にするな、と手を振つてやる。

中央にいたオーロンゲが膝をついた。が、

（戦闘不能にはならない、よな……！）

「――ふつ、これがじしん？　この程度の威力が？　笑わせるな！
トレーナーがポケモンの性能を抑え込んでどうする！」

カルムが歯をむき出しにして笑つた。

「本物を見せてやろう、キュウコン、ふぶき！」

「うわっ！　……うつ、ぐ……つ！」

猛吹雪が発生して、マサルの視界が真っ白になつた。右腕から流れていた血が凍りついて、火照つていた全身が一瞬で冷え切つた。吐く息が白く凍える。腹の底から震えが広がつて歯の根が合わなくなつた。

（やばい……寒……）

ワイルドエリアでもこんな吹雪にはあつたことがない。フライゴ

ンの呻き声が遠くに聞こえた。

震える手を意地で動かして、ボールを掴む。

「——ニンファイア！ マジカルフレイム！」

まじめな性格で気が強いニンファイアは、いつになく気合の入った声を上げて技を放つた。ボンツ！ と弾けた炎が吹雪を蹴散らす。（きつちり一体ずつ仕留めないと…）

マサルが狙つたのはオーロングだ。

だが、クリアになつた視界にいたのは、ガラルマタドガスだつた。カルムがマサルを指差して指示を出した。

「ヘドロばくだん」

「つ?!」

「ふいいつ！」

ニンファイアがマサルを庇つた。ヘドロばくだんが直撃して倒れ込む。

「ニンファイア！」

「さて、残りは二体だな、チャンピオン？ インテレオンとリザードンだ。知つているぞ。対策は完璧だ」

と言ひながらマタドガスをボールに戻し、別の二体を出してくる。
（パツチルドンとバリコオル……）

リザードンはこおりタイプに強いが、パツチルドンはこおり・でんきタイプだ。でんき技をくらうのはリザードンにとつてもインテレオンにとつても厳しい。

バリコオルがステッキで地面を叩いた。瞬間、あられが降り始める。

（ルール無用つてこういうことが）

理解するのが遅かつたのかもしれない。けれど、もつと早く理解していくとも同じことだつたろう。マサルはルールの中での戦い方しか知らないのだから。

焼け焦げるような痛みが内臓を圧迫した。焦燥。劣等感。不甲斐なさ。

（どうしよう……僕、どうすればいい……？）

パークアウト——2

(どうしよう……僕、どうすればいい……?)

息が浅く、荒くなる。

だが、カルムは容赦などしなかつた。

「早く出したまえ。でないと——」(おりのつぶて!)

「うわっ!」

氷の塊がマサルめがけて発射された。だが、
「ばぎゅあっ!」

「うおれおおつ!」

「リザードン?! インテレオン?!」

勝手にボールから飛び出してきた二体が、それらを打ち払い、尻餅をついたマサルの前に立ちはだかつた。

(怒ってる……)

怒った顔のまま二匹はマサルに向かって頷くようにした。マサルはそれを見てすぐに立ち上がつた。

(そうだ、僕が先に折れちゃいけない!)

自分を奮い立たせる。負けるわけにはいかないのだ。

「リザードン、ほのおのキバ! インテレオン、ねつとう!」

狙いはパッチルドンだ。マサルの指示を正確に受け取つて、二匹は同時に技を放つた。

が、

「バリコオル、サイドチェンジ!」

「つ!」

それは立ち位置を入れ替えるための技だつた。狙われていたパッチルドンがバリコオルに変わつて、身代わりになる。

ほのおのキバの直撃を受けてバリコオルは沈んだ。しかし、

「パッチルドン、こごえるかぜ!」

吹き抜けた冷たい風に、二匹が身震いした。動きがわずかに遅くな

る。(すばやさが下がつた——マズい!)

「でんげきくちばし!」

「つ、リザードン!」

リザードンの巨体が吹き飛ばされて、洞窟の壁に激突した。マサルがそちらに目をやつた、その隙にすかさず次の攻撃が飛んでくる。

「フリーズドライ!」

「しまつ——」

みずタイプに対してこうかばつぐんになるこおり技。マサルは血の気が引いていくのを感じた。

「インテレオン!」

「う……うおれおんつ!」

普段温厚なインテレオンが雄たけびを上げて、その場に踏みとどまつた。まるでマサルを悲しませまいとするかのように。

マサルは奥歯を強く噛んだ。

(負けない……負けたくない!)

久々に心の底からそう思つた。バトルの時はいつだつて負けたくないのだが、これほど“負けてはならない”と思つたのはムゲンダイナ戦以来だつた。

(僕がここで負けたら、きっと、ひどいことになる……つ!)

だから折れない。折ることは出来ない。

少なくとも、自分のために立つてくれるポケモンがいる限りは。

「インテレオン、ねつとう!」

煮えたぎる激流があられを溶かしながらパツチルドンを押し流した。

カルムの足元に転がつて、やけどの痛みにのたうつパツチルドン。「畳みかけるぞ。ねらいうち——」

——不意に、カルムがマサルの背後を指差した。

「ふぶき」

「つ!？」

パツと振り返る。と、そこに真っ白いキュウコンが現れた。あられの中から今まさに生まれたかのように見えたのは、特性・ゆきがくれのせいだろう。

「うわあああっ！」

豪風に吹き飛ばされ、マサルは冷たい地面に背中から倒れた。

「……う、……つ」

一瞬暗転した意識を引き戻してのろのろと頭を廻らせると、今の技で最後の一ポイントを削られたインテレオンが力なく倒れているのが見えた。

もう戦えるポケモンはない。マサル自身も立ち上がりれない。

（……負け、た……）

事実を認めた瞬間、全身から力が抜けた。もう指一本も動かせそうにない。途端に傷が痛み出した。裂傷だけではなく打撲も何ヵ所もあるだろう。ぐらぐらと視界が揺れるのは貧血だろうか、それとも負けたショックだろうか――

「んぐっ」

胸元を踏まれて目を開けた。スマホのレンズがこちらを向いている。

「さあチャンピオン、インタビューといこう。――負けた気分はいかがかな？」

負けた気分？ そんなのいつだつて同じだ。野良試合だろうがハンド付きだろうが、こんなルール無用の乱闘だろうが全部一緒。勝つたら嬉しい、負けたら――

「……悔しいです」

マサルの静かな声が気に障つたようで、カルムは鼻の横を引き攣らせた。

「それだけかね？」

「もつと強くなれる余地がある、つて分かりました」

マサルはインタビューの定型文をなぞつた。テンプレではあるが本心でもある。負けるということは別の方向に勝ち筋があるということだ。自分がまだ知らない戦略が。

そんなことより、マサルは気になつてしまつて仕方がなかつた。

「あの、あなたはどうしてそんなに強いのに、ロケット団を組織して悪いことをしているんですか？ どうしてトレーナージやないんです

か？　あなたならきっと、ルールを守つても——うつ、ぐつ……！」

胸を強く踏まれて、マサルは呻き声を上げた。

カルムが鬼の形相になつて睨みつけてくる。

「貴様に何が分かる？　貴様のような能天氣なガキに——何が分かるというんだ？」

「つ、あ……」

「強くなれる余地？　そんなものありはしない。都合のいい夢を見るな。いいか、ここがお前の限界だ。この先は無い。勝負に負けるとはそういうことだ」

「つ……そんな、こと……ないつ……」

マサルは力を振り絞り、まだ動く左手でカルムの足を掴んだ。

(負けたらそれでおしまい？　そこが限界？　そんなことがあるもんか！　だつてそうだとしたら——ホップは——キバナさんは——ダンデさんはどうなる？)

時々は足を止めるかもしれない。

大きな壁にぶつかつたりもする。

行先を見失うこともあるだろう。

けれど、決して引き返すことなく、その先を求める人たちを。

(僕は一番近くで見てきたんだから！)

カルムの言葉を受け入れるわけにはいかなかつた。

「僕の知つてる強さは……負けても折れない強さだ……つ！　何度も前の前が真っ暗になつても、次の道を探し出そうとする強さだ！　そういう強い人たちを僕はたくさん知つてる！　つ……僕も、そうありたい……だから……だから、『次は負けない』！」

カルムは醜悪に顔を歪めた。ぎり、と歯ぎしりするのが聞こえ、

「——次など無い！　ここでお前は終わりだ！」

「つ！」

手を蹴飛ばされた。胸ぐらを掴まれて持ち上げられる。抵抗するような力は残っていない。

そのままマサルは湖に落とされ——

「キュウコン、ぜつたいれいど」

めのまえがまつへらになつた

?

閑話：ぼうふう

ウツギ研究所が襲撃され、ワタルが負傷した——

その一報を受けて、キバナはバトルタワーに駆けつけていたのだった。

「よお

「ああ

感動詞ひとつで挨拶を済まし、ダンデはパソコンに、キバナはスマホに目を落とす。

「つ、おい、キバナ！ 犯行声明が出たぞ！」

「マジで？」

「これを見ろ」

トップニュースになっていた。ダンデが開いた動画サイトには、岩壁を背景に厭味っぽい顔付きの男性が映っていた。しかし、アクセスが集中しているようでなかなか動き出さなかつた。

ちまちまと進んでいた動画のローディングが一段落ついて、再生が始まつた。神経質そうだなと思つたキバナの想像通りの声が流暢に持論を展開し始める。

聞く耳を持たずに画面の男を見ていたキバナは、妙な既視感に首を傾げた。

「……なんかコイツ、どつかで見たことがあるような気がするな……」

「うん……オレもそう思うんだ。ガラルの出身かな？」

「んー…………ん？ ……あ、ああ！」

画面にアローラのキュウコンが映つた瞬間、キバナは両手を叩いた。

「このアローラキュウコン！ 思い出した！ 十年前のジムチャレー——オレさまが初めて挑んだやつのセミファイナルトーナメント、一回戦で当たつた奴だ！ そうそう、このアローラキュウコンにてこずらされたんだ……。確か名前は——カルム？」

『申し遅れたが、私の名前はカルム』

まるでキバナに応答したかのように、動画の男——カルムはそう

言つた。

そして薄く笑つたまま、

『ガラルのチャンピオンは始末させてもらつた』

爆弾を投下した。

「……は？」

「なんだつて？」

『彼の最後の言葉を聞くといい』

そう言つて画面が切り替わつた。

「マサル……」

啖いたのがダンデだつたかキバナだつたか、当人たちにも分からなかつた。

地面に寝ころんだマサルは、普段よりずっと分かりやすいふくれつ面をしていた。投げ出された右腕と上半身しか映つていなかつたが、見える範囲だけでも血にまみれていて、明らかにポケモンの技を受けたことが窺える。その周囲にあらががパチパチと音を立てて落ちていた。

『——さあチャンピオン、インタビューといこう。負けた気分はいかがかな？』

厭味な声に、マサルはあまり普段と変わつていないような調子で応答していた。やっぱりどつかズれてるよなコイツ、とキバナは苛立ち紛れに思つた。

ダンデが手のひらに爪を食い込ませながら、画面の中のマサルを凝視する。

マサルは誰も見たことのないような真つ赤な顔で吠えていた。

『僕の知つてる強さは……負けても折れない強さだ……っ！　何度も前の前が真つ暗になつても、次の道を探し出そうとする強さだ！　そういう強い人たちを僕はたくさん知つてる！　っ……僕も、そうありたい……だから……だから、『次は負けない』！』

ひび割れた声で張り上げられた叫びを、二人は歯を食いしばつて受け止めた。誰のことを言つているのかなどすぐに分かつた。

カルムが逆上したようにマサルの手を蹴つた。

『次など無い！　ここでお前は終わりだ！』

小柄なマサルは簡単に持ち上げられて、湖に放り投げられた。
そして、

『キュウコン、ぜつたいれいど』

アローラキュウコンが、マサルの落ちた湖を一瞬で凍りつかせた。
「マサルっ……！」

思わず、といった風情でダンデが声を上げた。キバナの手の中でスマホがびきりと鳴る。ロトムがおずおずと『キバナ、壊れるロト……』と囁いた。

再び画面が切り替わった。色白の男が満足げに微笑んでいる。
ぐるりと画面が動いて、マサルが入っている湖を映した。不純物の少ない澄んだ湖は、凍り付いて動かないマサルの姿を明瞭に見せつけた。

『ご覧いただいた通りだ。ガラルのチャンピオンは沈み、伝説のポケモン・ルギアは私のものとなつた！　世界のチャンピオンとなる第一歩に、これ以上相応しいものはない！』

カメラがカルムの方を向く。彼は両手を広げ、歌うように言った。
『世界よ、括目して見よ！　私がすべてを支配する。ポケモンの闘争本能を解放し、本物のバトルというものを思い出させてやろう！　手始めに——ルギア！』

ボールから飛び出てきた白銀の美しいポケモンが、その大きな翼を悠々と広げた。

『エアロブラスト！』

ひゅごおお、と暴風が吸い込まれる音がして――

――次の瞬間、放たれた空気弾は。

スピーカーの出力の限界を超えた轟音に途方もない威力を引っ付けて、洞窟の天井を貫きなお止まらず、空に突き刺さって雲を吹き飛ばした。

「つ……」

「マジかよ……」

画面越しでもよく分かる。とんでもない威力だ。――これが町に

向けて放たれたら、一体どうなることだろう。

『はははははははつ！ 素晴らしい！ さあ行こう、まずはジョウト、次はカントー、それからガラルだ！ 楽しみに待っているといい！ ふはははははははつ！』

厭味な高笑いを残して、動画は止まった。

瞬間、ガタンツ、と音を立ててダンデが立ち上がった。

「ちよちよちよちよ、待て待て待て！」

そのままズンズン大股で歩き出したダンデの腕を、キバナは慌てて掴んだ。掴んで踏ん張つたが引きずられる。

「待てって、オイコラ！ ダンデ！ 一旦落ち着け！」

「オレは落ち着いてるぞ！」

「どこがだ！ そういうことはオレさまを引きずるのをやめてから言え！」

それでもダンデが止まることはなく、そのまま扉を蹴破るように開けて外に出た。スタッフたちが何事かと二人に注目する。

「聞け、つて、この馬鹿！ お前が行っちゃ駄目だ！」

「なぜだ？！」

「お前がここを空けたら誰がガラルの人たちの不安に応えんだよ！ 結構な人数があれを見てたんだぜ、不安に思うに決まってる！ その内テレビも雑誌も取材だなんだつて押しかけてくるぞ！ その時に『大丈夫です』つて言えんのはお前だけだろうが！」

「つ……」

ダンデは奥歯を噛み締めて、しぶしぶ立ち止まつた。それでようやくキバナは手を離し、彼の前に躍り出る。自信満々に見えるように、わざと八重歯を見せつけて笑つた。

「このキバナさまが行つてきてやるから、ふんぞり返つて待つてろよ、委員長さま。チャンピオン救出の瞬間は配信すつから、見逃すんじゃねえぞ？」

「……」

「あ、そーだ、ネズでも引っ張つていこ。どーセ暇だろ、アイツ」

「キバナ」

ダンデは腰からボールを外して、差し出した。

リザードンが入っているボールだ。

「コイツを連れていいってくれ。心配しているから……」

「……わかつた」

「君に、任せるぞ」

「ああ、任せろ」

「気を付けて」

「おう」

「道に迷うなよ」

「お前じやねえんだから」

キバナはまつたく氣負つていない風の笑顔を浮かべ、「じゃな！」と手を振りながら駆け出した。

——ダンデに背を向けた瞬間、その表情は一変した。

(……許せねえな。いや——)

元々大きい一步がさらに大きくなる。

(——許さない！)

マサルの叫びが耳の奥に残っている。次は負けない。同じ言葉をキバナは何度呟えただろうか。——そこから“次”を奪った男を、許してなどやるものか。叫びが風を呼び魂の奥底が燃え上がる。

さつそくタワーの根元に集まってきた取材陣が押しかけてきたのを、「詳細はぜーんぶオーナーにお願いしまーす！」と軽々躲して、キバナはライゴンに飛び乗った。

?

閑話：りゅうのまい

「ネズ！ ネズ!! 四十秒で仕度しろ、行くぞ！」

フライゴンに乗つたまま飛び込んできた嵐の男は、そう言うが早いかネズの首根っこを引っ掴んでリザードンの背中に放り投げた。

それで、気が付いたらジョウトの上空だ。

(まあ、いいんですけどね……)

胸糞悪い動画を見た直後だつたから、飛び出すことに異存はなかつた。

(マリイも心配してましたし。つたく、マリイに心配させるとは、はた迷惑な男ですね)

心中で吐き捨てるように思いながら、自分を乗せているリザードンの背中を見る。彼の胸中が怒りで満たされていることは手持ちでなくともわかつた。

触れた背中は熱く、ぴりぴりと緊張感を纏つっている。

「——まさか、ダンデのリザードンに乗る日が来るとは思つてませんでした……」

「ああ？ んだつてえ?!」

「なんでもねえですよっ！」

ネズはキバナに向かつて大声で怒鳴り返した。そうでもしないと声が搔き消されるのだ。

「つと、ノイジーな……」

舌を打つて、持つていかれそうになる髪の毛を手で押さえる。

ジョウトの上空はすさまじい嵐だつた。風が渦巻き、横殴りの雨が肌を打つ。眼下の海は荒れ狂い、この距離でもわかるほど高い白波が立つていた。時間的には昼間のはずなのに、分厚い雲が地上に影を落としているせいで、とてもそうとは思えない。

自分がけちやつかり防塵ゴーグルを装備しているキバナが、スマホを片手に叫んだ。

「オーイ！ ネズ！ この嵐なあ、ルギアつてポケモンのせいらしい

「ぜえつ！」

「そおーですか！」

「でえ！ ネット民の情報だと！ マサルがやられたのはうずまき島つてところらしい！」

と言いながら、キバナは長い手で豪雨に霞む島を指差した。

「あそこだつてよつ！」

「そーでつ、すつ、かあつ、ああああああーつ！」

言い返す間も無く、リザードンが勝手に舵を切つた。

突然の急旗下に悲鳴を上げるネズ。それがあつと言う間に遠退いていくのを、キバナはひらひらと手を振りながら見送つた。

「——そんじや、オレさまはこつちだな。いくぜフライゴン！」

嵐に乗るのは大得意だ。まるでそよ風の中を進むかのようにすいすいと、キバナたちは嵐の中心へと飛び込んでいった。

果敢に報道を続けているテレビ局のヘリコプターへひらひらと手を振りながら、泳ぐようにして湾岸に近付く。ポケモンの技同士がぶつかり合つて閃光が散つていた。

(おー、いたいた。アイツがルギアか。……けつこうでけえな)

ルギアの姿を目視する。アイツが翼を一振りするたびに、風がいつそう唸りを上げた。聞いた話の通りだ。深海を統べ嵐を呼ぶポケモン。

ジョウトのジムリーダーたちが数人、その前に立ちはだかっていた。しかしルギアの大技に加えて多数のロケット団員の攻撃があり、形勢は不利なようだつた。昨晩から夜通し戦っているのだとしたら善戦していると言えるかもしれないが、そろそろ限界だろう。

キバナは目を凝らして——見つけた。

「……アレか」

カルム。アレが、マサルをひどい目に遭わせた男。覚えず牙を剥き出しにしてしまつた。それに呼応するようにフラ

イゴンが翼を打つ。一気に下降して戦場に急接近。

「よーつし、行くぜえフライゴン——とんぼがえり！」

キバナはパツと飛び降りた。フライゴンがぐるんと宙を舞つて、ル

ギアの腹に頭を突き刺す。

大きな呻き声を背中で聞きながら、キバナは砂浜に着地した。

「ナイス、フライゴン！ んでもつて、いつてこい、サダイジヤ！」

こうかばつぐんの技をくらつて、砂浜に降りたルギアの足元に。

サダイジヤは鎌首をもたげて、吠えた。

「すなじごく！」

ガクンツ、ヒルギアの巨体が傾いた。砂浜が渦を巻きながら陥没し、それに足を取られたのだ。

（これでしばらく、アイツはこの場に釘づけだ。その間に――）

「あの、あなたは?!」

声を掛けられて、キバナは振り返った。ハガネールに乗った女性が、警戒するような目でこちらを見ている。

「んあ？ あー、オレさまはキバナ！ ガラル地方、ナツクルシティのジムリーダーだ！」

「ガラルの……！」

「そう！ うちのチャンピオンが世話んなつたみてえだからな！ 助太刀だ！ そういうわけなんで――」

話しながら、キバナはボールを投げる。

飛び出したフライゴンが急旋回し、サダイジヤに襲い掛からうとしていたオーロングを掴んで投げ飛ばした。

「――てめえの相手はこのキバナさまが務めるぜ！ カルム！」

「……っ！」

キバナの鋭い目を真正面から受け止めて、カルムは苦々しげに舌を打つた。

？

閑話：おきみやげ

リザードンはフライゴンのようない器用でなく、風雨に真正面からぶつかつていった。一直線にうずまき島へ向かつて滑空する。背に乗っているネズのことなど忘れているに違いない。ネズは振り落とされまいと必死にしがみついた。

ルギアによつて開けられた大穴から中に入る。

風はようやく遮られたが、まだ気は抜けない。吹き込んでくる雨は相変わらず痛いぐらい強く当たつてくるし、リザードンが全力で翼を打つてているのだ。

（俺はダンデほどゴリラじゃねーんです、よ……つ！）

腕の力がそろそろ限界だ。だが限界だからと氣を抜いたら、一瞬で投げ出されるだろう。そうしたら間違いなくお陀仏だ。

（早く着いてくれ！）

ネズの祈りに応えたわけではないだろうが、リザードンはばさりと翼を打つて、スピードを緩めた。

着地。

ネズは半ばばざり落ちるようにして地面に降りた。

「ここ、ですか……」

膝が笑つているのを意地で押えつける。ほう、と吐いた息が白く凍つた。気温がかなり下がつているらしく、雨が凍つてみぞれのようになつていた。濡れた服が一気に冷えて、思わず身震いする。

すぐ目の前に凍つた湖があつて――

「つ……」

――その中に、マサルの姿があつた。

（リアルで見た方がキツツいな）

内臓がひつくり返るような感覚がして目を逸らした。怒りや吐き気、というよりは、恨みとか憎悪に近い感情が胸の中に渦巻く。思わず舌打ち、それから貧乏ゆすり。

唐突にリザードンが吠えて、炎の塊を吐き出した。

「おわっ」

猛火。業火。すさまじい熱量の炎が放出されて、ネズは飛び退いた。

だが、天候が邪魔をするのか、湖は溶けたそばからまた凍つてしまふ。

「ちよいちよい、んな考えなしに撃つたら、ぶつ倒れますよ……」

恐る恐るかけたネズの言葉など、リザードンには届かなかつた。

（チツ、おやに似て強情な野郎ですね）

こういう奴は放つておくに限る、とネズは判断して、辺りを見回した。

マサルのポケモンたちがあちこちに倒れている。みんな戦闘不能の状態のようだつた。

（ボールに戻す余裕すらなかつたつてわけですか。つたく…………ん？）

何かきらりと光るもののが目に入つた。

のそのそと近付いてみる。

（なんだ、マサルのカバンか。きつたな。もうちょい整理しやがれつてんですよ、俺でももう少し……何だこの——葉っぱ？ 光つてやがる）

謎の葉っぱが金色の光を放つていた。

（それにこの——なんでコイツ、こんなに大量に持つてやがんですかね——ねがいのかたまり。これもなんか、光つて……）

不審に思つたネズが、きんのはつぱとねがいのかたまりをカバンから出した。

瞬間。

「おわっ！」

ねがいのかたまりが弾け飛び、きんのはつぱが煌々と輝きながら浮

かび上がつた。

「な、なんつ……なんが起きると?!」

動搖したネズの大声に、というよりは、その葉っぱの光の威容に驚いたようで、リザードンも動きを止めた。

葉っぱはまるで意志を持つたポケモンのようにスウーッと宙を

滑つていき、湖の上——マサルのいる辺りの上で、ピタリと止まつた。光がどんどん強まつていく。

(やべえかなコレ……でもどうしようもねえよな！ つとに、トラブルばつか起こしてくれやがつて！)

金色の光に視界を塗り潰されて——

「——！」

初めて聞くポケモンの声がした。

まだチカチカと点滅している視界を、瞬きを繰り返してどうにか正常に戻す。

見えた瞬間、ネズは息を呑んだ。

「つ——……う、美しか……」

その大きな鳥ポケモンは、虹色の光沢を放つ美しい朱色の体をしていた。金色の尾と鶴冠トサカが羽ばたきに合わせてばさりと揺れて、その周りに虹の欠片のような輝きが飛び散る。

天空を翔る虹色ポケモン——ホウオウ。

呆然と見上げるネズの前で、ホウオウは大きく口を開けた。白に近い炎の塊が発生し、湖目がけて撃ちだされる。

「うおっ！」

あまりにも高温だつたためか、ただ溶かしただけでなく蒸発ませた。水蒸気がぶわりと舞い上がり、ネズの視界を覆つた。

咄嗟に顔をガードした腕を下ろす。と、

「マサル！」

溶けた水の中にぷかりとマサルが浮かんでいた。

「タチフサグマ！ お願ねがえします！」

勢いよく飛び込んだタチフサグマが、マサルを湖から引き上げる。陸地に転がすと、すぐにリザードンが寄ってきた。自分から熱が出ていることを理解している彼は、余計な炎を出すことなく黙つてマサルに首をこすりつけた。

ネズは真っ先に息を確認した。

(——生きて、ますね。ハア……良かつた……)

怪我はひどいものの、とりあえず死んではいなかつた。

ネズはべたりと座り込んで、前髪をかき上げた。雨に濡れそぼつて
いたはずの髪は、さっきの炎の余波を受けてすっかり乾ききつ
た。さつきまで全身にまとわりついていた嫌な汗も引いてい
る。

「マサル、しつかりすんですよ。すぐ病院に——

「う……」

小さく呻いて、マサルが目を開けた。

?

閑話：ドラゴンダイブ

「なぜ貴様がここにいる、キバナ！」

「なぜつてそりやお前、ご丁寧にご報告いただいたからなあ！　うちのチャンピオンを随分と可愛がつてくれたみてえじゃねえか！　そのお札を言いに、わざわざ来てやつたんだろうがよ！　——フライゴン！」

キバナが腕を振り上げた。

「吹けよ風、呼べよすなあらし！」

「ふりあああああつ！」

「つ！」

フライゴンが周囲をぐるりと一周し、その軌跡に沿うようにして砂嵐が発生した。ルギアの呼んだ雨が強制的に押し返され、乾いた風が二人を包む。

完全に包囲されたのを見て、カルムは鼻を鳴らした。

「デスマッチでも気取るつもりか？　愚かしい——貴様の対策などどうにしてある！」

回復させておいたバリコオルをボールから出す。

「バリコオル、あられ——」

「どんぼがえり！」

技が発動するより早く、フライゴンがバリコオルに突っ込んだ。弾き飛ばされたバリコオルは渦を巻く砂嵐に巻き込まれて、空まで放り投げられると、

「つ！」

砂浜の上に落ちた。

キバナが歯を剥き出しにして笑う。

「本物のバトル、つつたつけ？　いいぜ、乗つてやるよ。——だが、覚悟しろよ。オレはマサルほどお行儀よくねえからな！」

カルムは歯を食いしばった。十年前のトラウマがフラツシユバツクする。キュウコン以外はほとんど一撃で倒されてしまつて、なすす

べもなく無様に敗北した記憶——あの時もこの男は、目を爛々と輝かせ牙を剥き出しにして、こちらを見据えていた！

カルムは忌まわしい記憶を搔き消すように頭を振つて、猛々しく笑つた。猛り狂う胸中とは裏腹に、脳味噌は冷え切つてゐる。

「……これほど早くやり返す機会に恵まれるとはな！ わざわざ倒されに来たその蛮勇、褒めてやろう！ 光栄に思え——そして惨めに散るがいい！ いけ、オーロンゲ、ミミツキユ！」

「行くぜオレさまの相棒たちよ！ バクガメス！ ヌメルゴン！」
同時に放たれた四体のポケモンが、砂嵐のリンクの中央でぶつかり合つた。

「ヘドロばくだん！」

ヌメルゴンの放つた攻撃はオーロンゲに直撃し、体力を一気に削り落とした。こうかばつぐんの技に加えて、もともとフライゴンから受けたダメージがあつたのだ。

カルムは即座にオーロンゲを交代させながら、

「ミミツキユ、じやれつく！」

狙つたのはバクガメスだ。先にこちらを落とさないと、後に差し障る。

飛びかかつたミミツキユをバクガメスは甲羅で受け止め——次の瞬間、甲羅が爆発した。

「つ?!」

「トラップシェル、だぜ！」

キバナは得意げにニヤリと笑い、腕を振つた。

「仕留めるぞヌメルゴン、ハイドロ——」

「マタドガス！ ワンダースチーム！」

顔面に吹きかけられたピンク色の煙に、ヌメルゴンは足元を狂わされた。あらぬ方向へ飛んでいったハイドロポンプが砂嵐に吸い込まれて消える。

その隙に、

「ミミツキユ、いたみわけ！ ——決めろ、シャドークロー！」

ばけのかわの下から飛び出た鋭い爪がバクガメスを切り裂いた。

急所に当たつたらしい。戦闘不能。

「見たかキバナ！ 十年前と同じようには行かせないぞ！ 貴様のようには、ただ闇雲に再戦を繰り返すだけの愚か者とは違うのだ！」

——キバナはその目に、挑むのをやめたI.Fの自分を見た——
即座に余計な感傷を振り払う。ルール無用の争い中に、そんな暇は一瞬たりとも猶予されていない。

「ヌメルゴン、ヘドロばくだん！」

煙を振り払つたヌメルゴンが、ミミツキュを戦闘不能に追いやつた。そして、キバナを守るようにマタドガスに向かい合う。紫色の滑らかな背中が、自分と同じようにぴりぴりと緊張感をまとつているのを感じながら、キバナは声を張り上げた。

「誰が愚か者だつて？！」

「貴様だ！ 勝てもしないのにいつまでも挑み続けて！ まだ無駄だと分からぬのか？！」

「無駄ア？！ 何が！」

キバナは両手を広げ、獰猛に笑つた。

「オレさまの人生はこんなに輝いてんのに？！」

「つ……この、ドM野郎！」

「何とでも言え！ 一回の敗北で心折れたてめえに、あれこれ言われる筋合いはねえよ！ まして他人の『次』を奪う権利なんて、世界の神が許そうともこのキバナきまが許さねえっ！」

トレーナーの叫びに呼応して、ヌメルゴンが咆哮した。

カルムは思わず半歩下がつて——その足を無理やり前に出す。

「ヌメルゴン、かみなり！」

「パツチルドン、つららおとし！」

同時に炸裂した技がリングの中央で相殺された。

その衝撃で舞い上がつた砂煙に紛れ、マタドガスが接近する。

「マタドガス、ワンドースチーム！」

「つ！」

ヌメルゴンが倒れたのを見て、キバナは即座にボールを放つた。

「フライゴン！ 遠慮はいらねえ、ぶちかませ！ ——じしん！」

ズドンッ、と、強烈な揺れが全員を襲つた。砂浜の一部が崩れ、流れ込んだ海水が足元を濡らす。技の一番外側にいながら、キバナもカルムも膝をついた。中央で最も強い衝撃を受けたパツチルドンが力なく倒れ――

――キバナは目を見開いた。

「つ、しまつた、『ふゆう』か！」

「マタドガス、ワンダースチーム！」

技の矛先がキバナに向いているのを見て、すかさずフライゴンが滑り込んできた。煙の直撃を受けて翼を折る。

「悪い、フライゴン！ ゆっくり休んでくれ……！」

キバナは距離を取りながら、倒れたフライゴンをボールに戻した。

「ふつ、ははつ、これで終わりか?!」

「まさか！」

キバナは一笑に付した。

「一気に決めさせてもらうぜ――コーダス！」

コーダスはどすん、と両足を湿った砂に埋めた。途端に砂嵐が焼き消えて、頭上に晴天が広がる。

特性・ひやり。

太陽の光を燐々と浴びて、コーダスの背負つた熱が高まっていく。足元の水が音を立てて蒸発し、コーダスのすぐ後ろに立つたキバナの姿が陽炎のように揺らいだ。

「キュウコン、こおりのつぶて！ マタドガス、ヘドロばくだん！」

焦つたように下された指示は、しかしどちらも大した意味を持たなかつた。氷の塊は届く前に溶けきつて落ちた。直撃した毒の塊はコーダスを止めるほどの威力を持つておらず、飛沫の一、三滴を肌に受けたキバナも微動だにしなかつた。

雄たけびのように指示を出す。

「焼き尽くせ――ふんえん！」

炎をまとつた爆風が砂上を蹂躪した。

「おおおおあああああああつ！」

カルムの絶叫が炎の向こう側に消える。砂浜を侵食していた海水

が一気に吹き飛んだ。

——やがて、熱風が収まつた時。

「ぜつたいれいどのお返しにしちゃ、優しいもんだろ？」

砂に両手をついたカルムに向かつて、キバナはにつこりと笑いながらそう言つた。

カルムはそれほど怪我をしていなかつた。ポケモンが庇つたらしい。そうしてもらえるだけの愛情は注いでいたことだろう。（……ま、とつととお繩についてもらうとするか）

キバナはゆつくりと彼に近付いていった。

その時。

「つ……まだだ！　まだ終わつていないぞ！　キュウコン！」

「?!」

確實に仕留めたと思つていたキュウコンがよろめきながらも立ち上がつた。氣力だけで踏ん張つたらしい。

「こおりのつぶて！」

「コータス——」

——だが、氷の塊は明後日の方向へと飛んでいった。

ルギアを押しだごめていたサダイジヤの方へ。

「やつべ！」

奇襲を受けて、今まで踏ん張つていたサダイジヤは倒れ伏した。すなじごくが切れる。解放されたルギアが苛立つたような声を上げながら、翼を打ち浮かび上がつた。再び空が嵐に。

「負けない……私は負けないぞ！　ルギア、エアロブラスト！」

ひゅごおおおつ、と嵐がその口に吸い込まれて——

——放たれた。

?

せいなるほのおり

三度寝までして夕方に起きたような気分で、マサルは目を覚ます。寝すぎて眠い感覚の中で、ぼやけた視界を掻もうと瞬きを繰り返す。

やがて腹の辺りがじんわりと温かいことに気が付くと、それ以外の体の冷たさと重たさにびっくりした。動かそうと思つても動かせないほど、全身がだるくて痛い。

「マサル、頭は大丈夫ですか」

白と黒のボーダーが見えた。この色 この形 ドケトケ

「……しゃべる……タチフサグマ……バズる……?」

「駄目そうですね。わかりました。まあもうしばらくそのまま寝てやがれってんですよ。どうせ君がポケモンをボールに戻さねーと、移動も出来ねえんでした」

一
・
・
・

【…………負けた…………】
その言葉で思い出した。意識が急速に戻ってくる。

卷之三

悔しさと申し訳なさで胸がいっぱいになつた。体が動くのなら胸を搔きむしって暴れ回りたかつた。そうでもしないと今胸に詰まつてゐる黒い塊がどんどん大きくなつていつて、自分が飲み込まれてしまふような恐怖があつた。

「……今頃キバナがかたきうちしてますよ」

「キバナさんが……？」 ていうか、あれ？ ネズさん？」

「ようやくまともになりやがりましたね。ああ、起き上がるな。無理
しえんで、横んなつとけ」

ネアだけでなくリザートンにも抱き合ってマサルは大人しく力を抜いた。

「リザードン……お前、ダンデさんの?」

低い唸り声が肯定した。

「そつか……心配させたんだな……」

そう言つた瞬間、目の前が滲んだ。

「だめ、だ、僕……」

涙があふれてきたことがまた余計に悔しかつた。

（心配かけた——心配も迷惑もいっぱいかけた！ 負けたせ
いだ、弱いせいだ！ 僕がまだ弱いから——ポケモンたちだつて、
ちゃんと戦えなかつた——僕を気遣つて、庇つたせいで————悔し
い。悔しい！）

負けたことも、失敗したこと、等しく悔しくて。

でもそれ以上に、心配をかけてばかりいる自分の情けなさに、胸の
奥がキンと凍り付いた。

「もつと、強くならなきや……つ、こん、な、ふ、つに……心配、かけ
ない、ようになつ！」

「——それは無理ですよ、マサル」

「えつ……？」

ネズの骨ばつた手が、マサルのおでこをペしペしと叩いた。

「どんだけ強くなつたところで、心配はされるもんです。俺はいくつ
になつたつてマリイのことが心配でたまんねーですし、ダンデとホツ
プが互いを気に掛けなくなる日が来るとは思えねーでしょう？ キ
バナの野郎は、一度も勝ててねえくせにダンデの心配をしやがる。慣
れねー仕事で疲れてる、なんつって」

マサルは鼻を啜り上げて、ネズの方に首を傾けた。アイスブルーの
瞳がマサルを真つ直ぐに見返す。

「心配する、つてのに、強いも弱いも関係ねーんですよ。歳も格も関係
ねえ。それは、ただその人を失いたくない——大切だから失われてほ
しくない、つつー“愛情”なんですから」

ネズは淡々とした調子で続けた。

「だから、強くなる」と心配されなくなることは、別モンなんです
よ。君が誰からも心配されなくなるつてことはありえねえと思いま
す。……そんだけ愛されてるつてことを、ちゃんと受け止めて、ドー

ンと返してやりんしゃい！」

強くなるつてのはそういうことだと俺は思いますがね——そう言つて、ネズは珍しく微笑んだ。いつもしかめつ面で無愛想な彼の笑顔と、無骨だがシンプルな言葉は、マサルの心にすんなりと染み込んだ。

氷が溶ける。

「……今の、動画に撮つておけばよかつた」

「はあ?! 晒し者にする気ですか!」

「だつてせつかく良いこと聞いたのに、忘れちやつたらもつたいないじゃないですか」

マサルはへにやりと笑つた。

「ありがとうございます、ネズさん」

「どーいたしまして」

それかららゆつくりと起き上がる。傷は痛んだし、上手く動かせないところもあちこちにあつたが、さつきまでよりはずつと良かつた。心配そうにこちらを窺つてきたリザードンの頭を抱き締める。

「ありがとう、リザードン。君が来てくれて嬉しいよ

「君、ポケモンに対しての方が素直じゃないですか?」

「え? ネズさんもハグしてほしいですか?」

「嘘です結構ですやめてください。やめろって!」

ネズの拒否を拒否してマサルはひよいと飛び付いた。怪我人を強く押しのけることが出来なくて、ネズは色々諦め両手を上げた。^{ホーリードアツ}薄い胸板に額をこすりつけて、マサルはぼそりと呟いた。

「来てくれてありがとうございます。……僕、死にたくなかつた……」「……誰だつてそうですよ

ネズはマサルの肩を軽く叩くと、マサル^ごと立ち上がつた。

「立てますか?」

「うん、大丈夫」

マサルは自分の足でしつかりと立つた。

「実際のところ、君を助けたのは俺らじゃねえんですよ。あのポケモンです」

「え？」

テスガが持った刀向を見るとそこにはアシガ先色の鳥がいた。が、悠然とした佇まいに岩場に止まっていた。

その輝かしい虹色に、マサルの目は釘付けになつた。

「ホウオウ……」

マサルの咳きを聞き取ったかのように、ホウオウがその翼をばさりと広げた。

そしてマサルの目の前に降り立ち、首を下げる。

その大きな瞳の中に自分が映り込んだ。ホウオウの目を通してマサルは傷付いた自分の姿を見る。顔色は悪くて、全身は乾いた血と泥で汚れていて、帽子もない。ひどい姿だ。

けれど、思っていたほど、表情は暗くなかった。ホウオウがわざかに体を揺らして、低く囁いた。

C

「はあつ？！」

大声を上げたネズを無視して、マサルはよたよたと自分の手持ちた
ちをボールに収めて回つた。

(お疲れさま
みんな
……) めんね
あとは僕が頑張るから
ゆ二く

最後にカバンを拾つて、ちゃんとジッパーを閉めて背負う。

「ちょ、マサル、本気で行くつもりですか?!」

てくれませんか？」

「それは別にいいんですけど……」

ホウオウはマサルのため

「ん、と……わ、ありがとうございますリザードン！」

「ん、と……——わ、ありがとうリザードン！」
リザードンが押し上げてくれて、どうにかよじ登ることに成功する。ホウオウの上から手を伸ばしてリザードンを撫でると、彼は鼻から

ら息を吐いた。

(つたく仕方がないな——つて感じかな?)

「リザードンもよろしくね」

「ばぎゅあ!」

「よーし、それじゃあ行こうか! ホウオウ!」

マサルの指示に短く答え、ホウオウが翼を広げた。

大穴から見えるうずまき島の上空は、見事に晴れ渡っていた。

?

せいなるほののおー2

ホウオウの首にしがみついて、風を切る音を全身で聞く。吹き付ける強風に耐えながら目を開けると、ホウオウのいる辺りは青空が広がっていたが、海岸線は雨模様だつた。

ホウオウはまっすぐそちらに向かつた。嵐と晴天がしのぎを削り、やけに強い天氣雨になつた。

(あつちにルギアがいるんだね)

目指す方角に目を凝らす。

ルギアの巨体はすぐに確認できた。足元を気にしているような様子だつた。

(あれは……すなあらし?)

嵐の一角に、明らかに違うものが交ざつていた。天地を貫く砂の竜巻。

それが唐突に消えて、代わりに日差しが強くなつた。

すなあらし。ひでり。

「キバナさんだ!」

言つた瞬間、巨大な炎が噴き上がつた。

烈火が空を赤々と染め上げる。遠目に見ても分かるほどすさまじい威力。熱がここまで届きそうなぐらいだつた。

「うつ、はつ……すげ……!」

圧倒されたマサルが感嘆の息を漏らした。

その時。

不意にルギアが翼を打ち、嵐の勢力が強まつた。攻撃の体勢に入つてゐる。雨と風が彼の口元に集まるのが見えた。

(マズい、間違ひなく強いやつだ!)

「ホウオウ!」

マサルの声に従つて、ホウオウがスピードを上げた。ルギアの前に滑りこみ、くちばしを大きく開く。

——!!

嵐と業火が激突した。

「うつ……！」

技の衝撃に危うく吹き飛ばされそうになつたのを、ぎりぎりのところでこらえる。

今、ルギアは完全にホウオウを敵視していた。

「ルギアを鎮めよう。ホウオウ！ 回り込んで！」

左へ旋回。

（ハイドロポンプが来る！）

マサルはじつとルギアを見つめた。放たれる瞬間を見極める。気分は“みきり”だ。もちろんマサルにそんな技は使えないが、二度も見たのだから大体のタイミングは掴んでいる。

あとは集中力と勘！

「——今だ。ホウオウ！」

ぽんつ、と叩いたのに合わせて、ホウオウはすっと体を沈めた。瞬間、放たれた激流がマサルの頭上をすれすれに掠め飛んでいった。

（あつぶな！ でも――！）

隙が生まれる。

「突っ込め！」

技の直後で固まっていたルギアに、ホウオウが突っ込んだ。鋭いかぎづめのついた足で翼の付け根を掴み、押し倒す。

ズンッ

二つの巨体が砂浜に落ちた。

「おわっ！」

ついに耐え切れなくなつてマサルは宙に放り出された。

（やつぱい死ぬ！）

「マサル！」

リザードンが急旋回してマサルの下に回り込み、ネズが受け止めた。

「あつぶねえ」

「ひえ……助かりました、ネズさん、リザードン……」

そのまま砂浜に——カルムの目の前に降りる。

カルムは膝をついたまま、マサルを睨み上げた。

「貴様……敗者のくせに、私の前に立つな……！」

「ルギアを放してください」

「私が捕まえたポケモンだ！ 貴様が口出しできると思うなよ、小僧！」

吠えたカルムに寄り添つて、キュウコンが唸り声を上げる。

「貴様らの言うことなど誰が聞くか！ 私の戦う場はここだ、ルール無用の戦場だ！ ——誰にも認めてもらえない土俵で独り相撲をする惨めさを、貴様らが理解できるわけがないだろう！」

「だからつてこんな間違つてる！」

「間違つてなどいない！ ポケモンをルールの中に押し込んだ生ぬるい遊びで満足している貴様らからすれば異端だろうがな！」

「あつ……遊び……遊びなんかじゃない……！」

言つてやりたいことが山ほどあつたのに、どれも上手く喉から出でこなかつた。だからマサルは感情のままに怒鳴つた。

「遊びなんかじやない！ 馬鹿にするな！」

「黙れ、負け犬が吠えるな！」

「オーケイ、ブーメランだぜソレ」

キバナがひよいとマサルの頭に手を置いて、ニヤリとした。

「オレたちは敗者から言葉を奪わない。悔しいと泣くことも、次は勝つと吠えることも、全部認めて受け止めて、またいつでも挑みに来いつて言うのさ。だからオレたちは戦い続けられるんだよ」

「……戯れ言を」

「わかんねえからお前はそこにいんだろうな。まあ、なんにせよお前はこれでお終いだ。ジュラルドン」

顎先だけで与えられた指示を、ジュラルドンは正確に理解した。キュウコンを優しく押しのけて、カルムからモンスターボールを奪う。

「やめろっ！」

それを思いきり踏みつぶした。

ホウオウの足の下で暴れていたルギアがぴたりと止まつた。解放

されたのを感じ取ったように、ホウオウがそっと彼を放す。
二羽のポケモンは砂浜の上に並んで立つた。

神々しい声が蒼穹に響き渡つた。

そして二体は同時に飛び立つた。ルギアはうずまき島の方へ。ホウオウは北側の空へ。

飛び去つた後の空に、大きな虹が架かっていた。

「良かつた……これで……全部……」

安心が胸に広がつた瞬間、マサルの瞼が急に重たくなつた。目の前
が真つ暗になる感覚は二度目だが、一回目のような不快感は無かつ
た。両脇にいる大人二人が慌てた声を出すのを遠巻きに聞きながら、
マサルは素直に意識を手放した。

せいなるほののお—3

マサルが病室で目を覚ました時には、すべてに幕が下りていた。

カルムは逮捕され、ロケット団は壊滅。

何度もなく襲撃を受けてきたジョウトの町々は、慣れた様子であつと言ふ間に復興を進めていった。もうほとんど直つているらしい。たくましいものである。

マサルが起きるのを、ベッドの脇でキバナが待ち構えていた。その顔にいかくされたような気がして、マサルは恐る恐る声を出した。

「あの、キバナさん……」

「おつまえこの馬鹿！」

「ひえっ」

「どれだけ心配させれば気が済むんだよア。ア?! それともなんだ、心労でダンデを殺す計画か?! 良い度胸だなアその前にオレさまが殺してやるよ!」

「痛い痛い痛い、背え縮んじやう! 背え縮んじやうつて!」

頭にドラゴンクロールをかまされて、マサルは涙目になりながら抗議した。

ネズが「一応怪我人ですよ」といさめてくれなかつたら、身長が半分になるまで手を離さなかつたかもしれない。

キバナは腕を組んでそっぽを向いた。

「つたぐ……」

「……ごめんなさい、キバナさん。迷惑も、心配もかけました……」

「そーだな、本つ當に」

「ごめんなさい……」

マサルは一旦うなだれたが、がんばつて顔を上げた。

「でも、あの――助けに来てくれて、ありがとうございます。本当に、助かりました……ありがとうございました」

素直に下げられた頭を、キバナはちよつとだけ見詰めた。

「――つし、じゃあ、報告しとこうぜ!」

「報告?」

「hey口トム！ ポケスタ生配信開始だ！」

『了解口ト～！』

「ええっ?!」

びっくりして固まつたマサルをすっぱり無視して、キバナはカメラに手を振った。

「よお、みんな！ キバナさまのチャンネルだぜ！ 今日はジヨウトから配信するぞ！ ゲストは最近話題のお騒がせチャンピオン様、マサルだ！ オラ！」

「…、こんにちは……？」

キバナに背中を叩かれて、マサルは引き攣った笑顔で挨拶をした。「ショッキングな映像が世界中に流されちまつたけど、本人はこの通り、ぴんぴんしてるぜ。まあそれもこれも、このキバナさまとおまけのネズのおかげなんだけどな！」

「おまけってなんですかおまけって」

「じゃ、チャンピオンからみんなへメッセージだ！」

「え？ ちょ、聞いてないですよキバナさん！」

マサルは狼狽えてキバナを見た。が、キバナは愉快げに笑つたままカメラの向こう側に行つてしまつて、何も言わない。ネズの方を見ても、その目は“がんばれ”としか言つていない。

頭を搔きながら、マサルは考え考え口を開いた。

「えーと……その……、心配をおかけしました……すみませんでした」

「……オイオイ、それだけか？」

「うつ……うーんと……」

キバナの煽りに顔をしかめる。

「自分でも嫌になるんですけど、負け、ました……ので、その…………もう一回、色々と考えながら、やり直してみたいなつて思つています」「やり直すつて——お前——」

「ハロンタウンからシユートシティまで、ジムチャレの道順でもう一回、自分の足だけで歩いてみようかなー、なんて思つてるんですけど……」

「……ああ、そういう。ハハッ、いいんじやねえの？ ついでにジムリーダーたちと一戦ずつしていけよ」

「えつ？」

「嫌か？」

「いや、嫌ではないです。むしろ嬉しい……いいんですか？ それじゃあご褒美になっちゃいますよ？」

「お前、そーいうところだぜ……」

呆れたように笑いながら、キバナが隣に戻ってきた。

「ま、でもそれ、けつこう良い企画じゃねえ？ ガラル一周懺悔の旅。生配信しながらやれよ。ジムリたちとガチバトルして、勝つまで先に進めないつてルールでさ。ラストはバトルタワーでのオーナー戦！ よくね？」

「いや、マジでご褒美なんですけど……」

「んじゃ、ペナルティとして、『ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。ファンサもバトルも喜んでやります』って書いたタスキつけて歩けよ」

「え、はつづ」

「ペナルティだからな！」

キバナはカメラに向き直った。

「見てるかダンデ！ そういうことだから！ また連絡するぜ！」

「あっ、ダンデさんに連絡してなかつた！ ロトム～！」

「馬つ鹿お前、そういうのは後にしろよ。つつーかお前のスマホ、今修理中だぜ」

「マジですか？」

「そりや、ぜつたいれいどをくらう想定で作つてあるスマホなんてねえだろ」

「そんなあ……」

「つたく、呑気なもんだぜ。——この通り、チャンピオンは健在だから、安心してくれ。心配してくれたみんな、ありがとな！」

「あつ、ありがとうございました！ すみませんでした！」

「じゃあまた配信するぜ。おら、ネズ、お前も入れ！」

「ええ～……」

「まつたなあ～！」

しぶしぶ入ってきたネズと三人で画面に向かって手を振つて、キバナは配信を止めた。

瞬間、『ダンデから電話口ト～』の声。

「さつそくか。——よお、ダンデ。見てたか？　——おう。分かつた。

マサル、代われつてよ」

マサルはびくりと肩をこわばらせた。きつと怒られる。けれど出ないわけにはいかない。

ひとつ深呼吸をして、それからスマホを受け取つた。

「……もしもし、マサルです」

『……』

不気味な沈黙に底知れない恐怖を覚えて、マサルはとにかく謝ろうとした。

「あの、ダンデさん、僕――」

『うん。オレはバトルタワーで待つてるぞ』

「え？」

『ハロンタウンから出発して――今の君なら、三ヶ月くらいで来れるんじやないか？　それ以上は待てないからな。なるべく急いでくれ』
「つ……」

泣くつもりなんて欠片もなかつたのに、涙が溢れ出てきた。スマホを耳に当てたまま、膝に顔をうずめる。――意地を張つて“心配なんか”と思つたことが思い出されて、死にたくなつた。同時に、死ななくて良かつたと思つた。また戦える――まだ戦える。大好きなポケモンたちと、大好きな人たちと、思いつ切り競い合える。

それが、何よりも嬉しい嬉しかつた。

何よりも嬉しいと思っていることを理解してもらえたことが、さらにな嬉しかつた。

『また一回り強くなつた君と戦えるのが、今から楽しみで仕方ないぞ！』

『……はいつ。ありがとうございます、ダンデさん……つ！』

できるだけ声が震えないようにしたつもりだったが、きつと見透かされているだろう。けれどダンデは何も気付かなかつたよう『キバナに戻してくれ』と言つた。

マサルはしゃくりあげのをこらえながら、キバナにスマホを返した。キバナは「おいダンデ、オレさまとも勝負しろよ。いい戦法思付いた——ああ？ 明日？ それは駄目だ、せつかくだからちよつと観光してから帰りてえ。ワタルさんとも戦いたいし——ズルいとかいうな。お前は戦つたことあるだろ?!」なんてごちやごちや言い合い始めた。

それを横目に、マサルは大きく伸びをして、ベッドに横たわつた。(はあー……なんか、お父さんのこととかどうでもよくなつちやつたな)

本来の目的をすっかり見失つていた。けれど、それももはやどうでもいい。

通話を終えたキバナが目を輝かせながら振り返つた。

「なあ、お前らも観光してから帰るだろ？」

「はあ？ 嫌ですよ。マリイが待つてますから」

「そのマリイちゃんにお土産のひとつも持つていかなくていいのかよ」

「むつ、それは駄目ですね……」

「だろ？ まあ付き合えつて。マサル、お前の退院明日だつたよな。お礼参りをかねてジョウト一周するぞ。この地方のジムはガラルと違つて、シーズン関係なく挑戦させてくれるらしいから、三人で制覇しようぜ！」

「ただの道場荒らしじゃねーか……」

「交流試合つて言えよ、交流試合！ 非公式のな！」

キバナがけらけらと笑う。ネズは嫌そうに顔をしかめたが、存外満更でもなさそうだ。

マサルは胸の中を満たす温かな空氣の名前を知らなかつた。けれど、それが決して手放してはいけないものだと——そして、この数日のうちに失いかけたものだと——いうことだけは理解できた。

(今そばにいてくれる人を大切にする方が、ずっと重要だよね)

ルギアとハウオウが作った虹が、まだ青空に架かっている。それを窓ガラス越しに見上げて、マサルはいつものようになんやりと笑うと、二人の方を振り向いた。

「いいですねソレ！ 最高です！」

余談：とつておき

「カルムはアローラ地方の出身で、家庭の事情でガラルに引っ越してきたらしい」

と、キバナはワカバタウンへ向かう道すがら、スマホを片手に語つた。

「で、二十歳くらい——今からざつと十年くらい前だな。ガラルのジムチャレンジに参加した。そのセミファイナルトーナメントの一回戦でオレさまにぼろ負けして挫折。じょウトちに来てからはルール無用のバトルに明け暮れてたらしい。そつちの世界じや結構強くて、もう奴らも多くて、そいつらが口ケット団の構成員になつたんだってさ。突然口ケット団なんて組織した理由まではわからんねえけど」

野生のオタチが草むらから飛び出してきて、ゆっくり歩いていく三人の脇をぴょんぴょんと跳ねていった。

「それじゃあ、キバナさんはカルムさんのこと知つてたんですか」「アローラキユウコン見て思い出した」

「珍しいですもんね」

「相性最悪だしな。すっげー手こずらされたの、よく覚えてるぜ」

ポツポツの群れがやかましく鳴きながら頭上を通していった。それを目で追つて、キバナは小さな声で続けた。

「——負けて嫌になる気持ちは分からなくもないけどな」

万感の思いが込められているような聲音だった。

思わず黙つてしまつたマサルの代わりに、ネズがさらりと言つた。

「ライバルに恵まれて良かつたですね」

キバナが上を向いてしまうとその表情は誰にも窺えない——神様以外。

けれど、

「まあな」

と軽く答えた声は、なんだか笑つていて、あとは工事の手が入

半壊した研究所はあらかた片付けられていて、あとは工事の手が入

†

ればすべて済むという具合になつていた。

ウツギ博士はマサルの無事を泣いて喜んで、キバナにもネズにもハグをして礼を言つた。

それからようやく落ち着くと、三人のためにお茶を入れてくれた。
「マグノリア博士とも連絡を取つて、いろいろ話したんだけどね」とウツギ博士は言つた。

屋根が半ば落ちたせいで、朝の陽ざしがテーブルに降り注いでいる。これもなんだか悪くはないでしょ、なんて思つているような顔で、オタチがマサルの足にすり寄つた。

「君が持つていた“ねがいのかたまり”というやつは、巣穴の中にダイマックスポケモンを無差別に呼び寄せるためのものなんだってね？」

「はい、そうです」

「おそらく、だけど、うずまき島はルギアの巣穴と呼べる場所でしょう？ そこにねがいのかたまりが干渉して、さらにきんのはつぱがホウオウとの縁を結んで、それでホウオウが来てくれたんじゃないかな……なんて思つてているんだ」

「なるほど」

本当ならホウオウはスズの塔の上空を住処としていて、塔の最上階でしか会えないのだという。それを捻じ曲げてうずまき島に降り立たせたのだから、きっとねがいのかたまりの力が干渉したのだろう、という話だつた。

ホウオウが来てくれなかつたらあの場で死んでいたかもしれない。そう思うとマサルはぞつとした。

「それで、君たちはすぐに帰っちゃうの？」

「いえ、せつかくなんで、ジョウトを一周してから帰ろうと思つてします」

キバナさんが朗々と答えた。

するとウツギ博士はにつこり笑つて、

「そつか！ やっぱワタルくんの言つた通りだつたね！ それじゃあこれを！」

「……手紙？」

「ワタルくんから、君たち三人宛さ」

三人はちょっと互いの顔を見合つた。

マサルが代表して封筒を開けた。キバナは座つたまま、ネズは立ち上がつて、マサルの手元を覗き込んだ。

『マサルくん、キバナくん、ネズくん

本当は直接言うべきだったのだが、事後処理に追われていて、このような形になつてしまつたことを許してほしい。

この度はジヨウトの事件解決に協力してくれてありがとう。君たちがいなかつたらどうなつていたか分からぬ。心から感謝するよ。何かお礼を、と思ったのだが、君たちが一番喜ぶものが分からなくてね。

もししばらくジヨウトにとどまるようだつたら、ぜひ各町のジムリーダーたちのところへ行つてみてほしい。君たちの強さに彼らも興味を示しているし、ジヨウトの恩人をエスコートしたいという気持ちもある。バトルでもガイドでも喜んで引き受けてくれるだろう。

フスベシティに行く前にはおれに連絡を入れてほしい。ぜひ相手になりたいのね。

では、平和なジヨウトを楽しんでいつてくれ。

ワタル』

読み終えると、三人はにんまりとした笑顔を突き合わせた。

「道場破りコース確定じゃねえかよ」

「ワタルさんのお墨付きなんだから、公式の練習試合つつてもいいだろ！」

「やりましたね！ これで堂々と戦えますよ！」

「君のそーゆーところ、嫌いじやねーです」

「スケジュール的に一週間がギリだから……ちょっと急いだ方がいいかもな」

「じゃあ早速行きましょう！ ウツギ博士、ありがとうございました

！ また来ますね！」

「お世話になりました」

「ありがとうございました！」

バタバタと慌ただしく駆け出していった三人を、博士の「気をつけ
ていつてらっしゃい！」という声が見送ってくれた。

おしまい